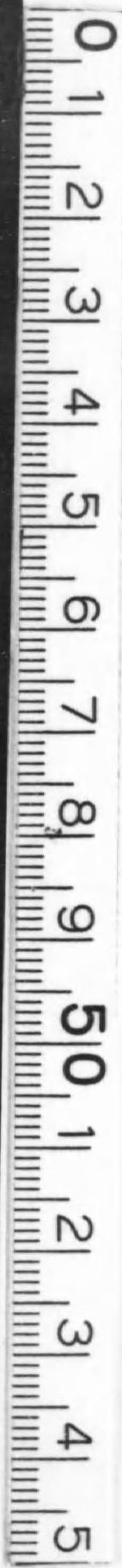


910.8-N776ㄅ



1200500754882



始



910.8
N776
(14) 7



近代短歌

折口信夫著

日本文學大系・第十四卷

東京河出書房



この本のはじめに

近代短歌の歴史敘述は、既に幾人か計畫し、幾人かしあげた問題である。其に私も、手をそめて見る。すれば幾分かはつた方法を以て、何かの點で、新しい考へ方を學界に寄せることなくば、何にもならぬことである。其で、最古の形の列傳體の短歌文學史を綴つて、多少歌人の生活内容を出して見ることにした。だが、其もはじめて見ると、一人々々の分に澤山の紙數がかり過ぎて、枚數の知れた此本の上では、どうにもあがきのつかぬことになつて來た。其で思ひきつて、近代短歌の上で問題になりさうな數人の列傳を中心にした物のやうな姿を、連ねるに編年を以てして、どうにか辻褄をあはせて、書きつめて見た。かうして見ると、學問としては頗をかしくない書き物になつた。だが、爲方がない。幾年か後に、また興味が、今日と同じ方角に向いた時、残りの草稿に書き足して、順序立てゝ行かう。その第一計畫として見れば、

まんざらむだでもないやうな気がし出した。

ことわつて置きたいのは、とり出した人々が、必しも文學價值から言つて、一流の人と、私が認めてゐる人ばかりではないことである。色々な考へ方からとりあげたもののあることは、讀んだ上で訣つて頂けると思ふ。

次田さんの本に、きつぱりと續くやうにと、初手は考へたが、書き進む中に、さうも行かない気がして初めからまた出直した形になつた。これも是非がない。

最正確な意味で、短歌における近代と言ふことの出来るのは、恐らく室町時代からであらう。一等外郭式な事實であるが、勅撰二十一代集が此期の初めに完了した形になつたことである。内側に入つて見れば固より、其には色々な原因はあげられるが、形式から見れば、どうしてもさうした結論は出て来る。つまり短歌が、宮廷及び貴族との關聯を、一應斷絶した形を見せてゐるのである。

私のこの短歌史は、實作に携つて居る多くの歌人に對して書いて居るものではない。もつと外に、公平な立ち場の「歴史家」を要求して居る、讀者たちを目あてて記してゐるのである。

さて、現代にもまだ生きて居り、尙若干の生命を残して居る短歌文壇の「定見」によつて、正しい批評は、到底望むことが出来はすまいと思ふ。だから私は、「現在」は、たとへば文學の價値をきめるのに間違ふことは少いとしても、其が歴史的價値を文壇に與へ過ぎるといふ過誤を犯し易いことを言はうと思ふ。其上に、生きた文學殊にある特殊な鑑賞法を要する短歌のやうなものでは、どうも常に、ある有力な批評によつて一つの傾きが強ひて作られる懸念がある。こんなことを思ふと、元義・良寛が極めて順調に受け容れられると言ふことが、今の要求に似たものを與へてゐるからであり、曙覽の喜ばれるのも、眞實、曙覽の全貌が認められて居るからなのでもない、といふ氣がするのである。

さればと言つて又、江戸の短歌作者として、誰が最もはやされて居たかといふ事に傾いて考へることは、過のもとである。が、江戸式の鑑賞法において、謂はゞ短歌の本質的なものと認められるものは、もつと正しく見られてよいと思ふ。其上に、其作物についての査定が意義を發揮して來るのでないかと思ふ。つまり江戸文學の準據が多くの誤りを含んでゐたと同じく、

——文學論の進んだ——今でもやはり、常に若干の過誤のあることは事實なのだ。今日の過が

過去の正しさを無視することもあり、又過去における作品を、おぼさつばな批評態度でかたづけしてしまふ嫌ひがあるからである。

短歌のやうなある豫備知識を前提としたものには、殊にその豫備知識にくらまされない限りにおいて其を知つてかゝらねば、第一著手における用意がないといふことになるのだ。新派短歌起つて以後、今に到るまで、江戸以前の作物に對する批評が、さうした用意を缺いた、單なる正義觀に似たものから出てゐるのが、多いのである。改革時代に於いては、と見かう見してゐる事は、なる程許されないであらう。だがもう、短歌史の上から現在の短歌を照し見るといふ形が出て來てよいと思ふ。私のこの書物は、其準備作業にしか過ぎないのである。

誰ともまだ咄し合つたことはないのだが、私一人の昔が思はれる。恐らく日本文學の中でも、短歌に多少手を染めた若者が、國文學を専門にする氣を起した頃、まづ思ひ立つのは、短歌史或は稍廣くて、歌謡史であらう。私も中學校を出る頃から、そんな志を懷いて、數年持ち續けて居たやうである。其が國文學者の爲事として、如何にも啓蒙的な興味だといふ事は、其後長

く忘れてしまつて居たことでも知れる。そんな二十年三十年の歲月の流れた末に、「近代短歌」の歴史を書くやうに憑められた。其時は何とも考へなかつた。此草稿の凡終りに近づいた今、ふつと心を横つた記憶が、私の心を幼く潤してくれた。誰しもする考へ事だ。さうして、誰も亦記憶の下積みに忘れて行く計畫だ。私の友だちの誰彼も曾ては短歌史を書くと言つて居た。其がやはり、皆忘れてしまつて居る。

私には、幸福な機會が廻つて來て、幼かつた初一念を達することが出來たのである。爲事その物の價值よりも、昔心を燃した物思ひを、今にして、思はずに遂げて居るといふ喜びである。さうして其喜びも、寂しいもの足らなさを多く交へてゐる。其だけに一人、みそかごとでもするやうなほくそ笑みに、心がほころびさうになる。

近代短歌 目次

この本のはじめに……………一

一 短歌史の意義……………三

二 前江戸時代……………一九

一 文學の交替時代……………一九

二 歌道と連歌と……………二四

三 武家の歌人……………三七

四 歌風の流れ合ひ……………四六

三 江戸時代……………四九

一 細川幽齋……………四九

二 地下の歌人……………五四

三	木下長嘯	五九
四	啓蒙時代	七五
五	隱者及び學者	八〇
六	古文學の發見	八七
七	萬葉調の概念	八八
八	眞淵と宗武と その一	九三
九	眞淵と宗武と その二	一〇四
十	蘆庵と景樹と	一二九
十一	加納諸平	一四四
十二	良寛	一七三
四	明治時代	二〇九
一	池袋清風	二〇九
二	新派運動	二三八

三	正岡子規	二四六
四	與謝野鐵幹	二五五

近代短歌

折口信夫

近代短歌



短歌史の意義

歴史の上に施されてある時代區畫は、その代々の人々の細やかな心理までも、觀察して立てられたものであらず。此は、歴史上の大事件で、恰も時代全體が鮮やかに舞臺替りでもするやうに、見れば見られるところから出る間違なのである。だから其に伴つて、文化現象も、一時に豹變するものと謂つた考へ方の上に立つ速斷が、とつても深く沁みついてゐる。だが事實は、一通りの整頓が人々の心の上に来て、次の時代らしい特色を表すやうになることは、なか／＼

容易なことではなかつたのだ。

文學史が、思想史の一分科のやうに見られ、又同じく補助學科のやうにも考へられて來たのは尤のやうに見えた。而も其が、一番低い程度の成迹すらもあげて居ないやうに見えるのは、どうしたことであらう。時代史から演繹せられた單純無反省な文學思想史が力を持つて居た。其爲此時代の世相と人心との關係がかうだから、文學も勢、かうならざるを得ないではないかと言ふ風な見方が、煩ひとなつて來たのだ。

戰國亂離の時勢だから、人は皆安住の心を持ち續けることが出來ない。さてこそ、此時代の文學は、かくの如く悲しみ愁ひ、かくの如く斷簡零墨と言ふべきもののみ多いのだと言ふ。なる程、さう謂はれて見れば、誰にもさう考へられる。併し其では、文學史が、時代史或は政治史から説明せられてゐられるのであつて、文學史から何の新しいものも寄與してゐた訣ではないのである。況して、戰國の世にも、のどかな文學を愉しむ文人がゐて、朗らかに歌ひ、長篇の作物までも残してゐる。ばかりか、もつとのほゝんな有様で泰平の文學を製作して居た者も、澤山にあつた位である。かうした方面を考へてこそ、他の史的基础に立つ學問々々の助勢にもな

らうと言ふ訣である。

「江戸時代の文學」「江戸時代の短歌」と言ふやうな名目は、時代史の區畫を假りに利用したままである。文學の上での「江戸時代」に當る時期は、時代史の江戸時代とは、大分つぼが合はない。つまり、普通に江戸と稱してゐる時代の持つた文學らしいものが出て來、其が成熟し、又爛熟廢頽し、其上次の時代の萌しを持ち出して來た、さう謂つた全體に通じるものでなくては、文學上の「江戸時代」と言ふ訣にはいかぬのである。

だから、江戸文學は、關東將軍が江戸入城の時を記念して初まるものでもなければ、關ヶ原合戦を交叉點として、ふり替るものでもない。又、既に幕末各種の文學に、新時代の姿を示し出してゐることも、鋭敏に見なくてはならないし、同時に、皇居が京都から、新しく修築せられた江戸城にお遷りになつた頃から、明治文學になり替るとも謂はれない。明治十年から二十年までの間に、古いものは段々迹を潛めて行つた。此期間にも江戸文學は認められるのである。尠くとも、文學史としての江戸文學は、さう言ふ風に見るのでなくてはならない。

私のうけ持ちは、短歌の歴史である。短歌ばかりが、ほかの文學史の姿から自由であつたとは

謂はれない。其で、此だけの前置きはする必要があると考へたのである。

此序に述べておくことは、かうした短文學の性質上、作者の生活が極端に作物に響いてゐる。而も大昔から、ある歌はある人の所産と考へることによつて意味を持つて來た歴史の上から、どうしても、作者についてよく考へる必要がある。其と共に、さうした久しい見方の爲に、文學としての價値の考へ方は、固定し易かつた。又作者と作物との關係も、密接に考へられ過ぎて、人格論が作物の上まで及んでしまつた例が多過ぎた。又過去に定まつた價値は、何時までも傳襲せられて、容易に變化しなかつた。其で正しい場合の外、存外な誤つた評價が、驚くばかりに多かつた。だからどうしても、個人々々について審らかに見直す必要があると思ふ。其で私は久しぶりに列傳體を交へた文學史を作つて見る氣になつた。だが其ばかりでは到底多くの作者——其も其中から私の擇り出した作者だけを書いて行くのも容易でなかつた。さうして此本の分量ははやく超過してしまつた。其で重要な人の敘述も割愛した。外々の論議文に譲つてもよいやうな變り目の少い記述は、ひつこめることにした。又其を豫め思つて書かなかつた人も多い。だからほんの十數人の記述にしか過ぎないことになつた。此意味で、江戸初期に

もつと述べねばならぬ人たちも、眞淵・景樹門流の人々なども、大抵は載せなかつた。明治の新派運動でも、池袋氏前後の人々、其から直文・信綱以下の人々についても、批評や敘述はしないでしまつた。とりわけ、私の師匠服部躬治先生の、世間から疎かにせられてゐる價値の修正の、私としては最意義のある爲事すら、こゝにはあきらめてしまつたほどである。其から思へば、一層色々な學問上の未練も思ひきり易かつたのである。

其から此本は、去年の夏と今年の夏と二夏の間、参考書のない山の中で書いたものである。引いた作物や、歴史上の事がらに存外な思ひ違ひがないとも限らない、大抵は校正以前に手入れたつもりで居る。だが、尙誤りのない事は保し難い。今後もそろ／＼、其手入れはして行くであらう。

此を讀み返して行くについても、書きあげの當時山へ持つて行つた僅かの書物の中、殊に「明治短歌年表」の著者小泉荃三さんに改めて、御挨拶を申しておきたい。其は忘れてゐた古い事を、思ひ起し思ひ出させてくれたからである。

まづかうした姿で行くと言ふ、計畫の進行中の形を見て貰へればよい。

二 前江戸時代

一 文學の交替時代

江戸時代としての土臺が、既に短歌の上に現れて來た時期を、假りにかう言ふ名で畫して考へたいと思ふ。

勅撰和歌集は、第二十一代新續古今集に綴めを作つて、再出る時もなくなつた。而も其前後に準勅撰集の傳説を持つた選集が二つある。一つは、新葉和歌集であり、今一つは連歌集としての菟玖波集である。前後に四五十年は隔つて居るが、本格なものを欲するよりも、まづ幾分氣易い準位に在るものを立てようとするのが、室町時代の公武の間に行き渡つた氣風と見ることも出来る。だから、此外にも準勅撰格の集がなかつたとは言はれない。

が、此事實から窺ふことの出来ることは、歌そのものを、本格式に守つて行く自信ある歌人が、堂上の傳統には殆、なくなつたと言ふことである。さうして、同じ公家でも、歌の傳統に關係のない人たちの間に、相當な作家が出て来て、正統を誇る人たちの爲に擁護の務めをし、或は却て、嫉視すらせられるやうになつて来たことだ。

第二には、連歌が成長して、世間の興味は寧、其方に向つて居た。歌人と言ふばかりか、歌の正統の人々すら、連歌を本藝風に詠出する風が、前代以來愈激しくなつた。今までは、短歌の準備としての連歌であつたものが、今は連歌を價值づける爲の折り紙として、短歌が考へられて来たのであつた。だから右の歌道の師範家は、連歌及び短歌の上の「本阿彌」としての位置を新しく持つやうになつて来た訣である。だから、作物などは出来なくとも問題ではない。かう言ふ時代に、勅撰集の出る理由がない。

又、此には、宮廷の式微の結果と見るのが通説だらうが、勅撰集事業についての經濟力は、今日の我々の算段から出て来ないが、思ふに唯今のやうに、調査局式のもの新しく設けられる訣でもあるまいから、わりに問題にならないだらうと思ふ。唯、之に採否の執心を寄せる筈の

公家が、深い關心を失うたと言ふ點の方が、主な原因であらう。即、擁護者なく、選者なく、作者のない時代である。極端にいへばさうなる。一つは公家を通じて、個々人の研究創作時代が、既に初まらうとする時だつた。無力な本阿彌を煩すには及ばないやうになつたものであらう。第四には、師範家傳統の所屬が、前代よりも自由になり、必しも宮廷・公家の一つ流れを守らなくても、差支へがなくなつて来てゐる。二條冷泉兩統が、此勢に乗つて、互に翼を伸べようとした。が、單に家格を重んじる時勢に迎へられて、二條家は榮え、公家にも新しく範圍を擴め、武家その他にも、開拓する所が加つた。さうした結果、却て二條家は衰へて、あまりきはだつた働きをしなかつた冷泉が、生き残ると言ふやうなことになつた。

第五、箏・琵琶・笛など、藝能の傳説が、公家では早く上流にあつたが、次第に繼承を相傳式にすることなく、幾人にでも、堪能なものに傳へて、流派を作つて行つた。其に對しては、歌道の師範家なるものは、王朝末から鎌倉へかけて見ても知れるやうに、大貴族の家でなく、中流下流の公家たちであつた。平安においてすら、「御子左」の末流、「六條」の末流に過ぎなかつた。此は藝の傳承と知識の傳承とに、自ら岐れる理由だが、傳書を以てしても出来る歌道の

傳承が、小貴族の家の狭い血族に限られるやうになつた訣はわかる。其が遅蒔きながら、藝能の傳統と同じ形式を採るやうになつた。まづ二條家が、血族相承の固執を棄てるやうになつて行つた。次第に、公家・僧侶・隱者・武家にも及した。さうして、其讓る知識にも段階が生じて、全部を與へきつてしまはぬやうな形が、出來あがつた訣である。此が傳授である。

第六、かう言ふ點では、新興の連歌の方が、すつと自由であつた。さうして其傳統も、古い藝能と同じに、大貴族から、優れた者に自由に傳へる、と言ふ風を採つて來てゐる。短歌傳統の間に生じた連歌が、いつか大貴族のものとなつて居たのは、官の受領と同じ精神で、宮廷のものは宮廷へ、と言ふ姿に近づいた訣でもある。だが、隱者である——僧侶・武家或は庶民出の——連歌師は、更に歌道師範家を見習つて、傳授の形式を採るやうになつた。

第七、師範家が、擁護者から自由になり、新しい多くの位置低い執心の徒にも、師範に替つて傳授するやうになつて、ちやうど、公家と庶人との中間の存在見たいな形になつて行つた。

何も、右の七條に限つた訣でないが、大體右のやうな形が見える。此が短歌史における所謂室

町時代と、江戸時代との過渡期の形である。此様式こそ、下室町時代とも亦、前江戸時代とも言ふことが出来るのである。

二 歌道と連歌と

連歌が二條良基や三條西實隆などを上に、下には連歌師が多く頭を連ねて出て来てゐるのに、短歌の方は、全然さうした後世の宗家に似た檀那階級を持たなかつたのは、短歌自身が新興藝術でなく、又藝術が貴族階級の物好みによつて、保護せられ、傳承せられるやうな時代には、既に完成し過ぎる程成熟しきつて居たのだ。正しく短歌は宮廷直屬で、師範家は代官と謂つた形をとつてゐたのである。さればこそ、勅撰集も續いて欽定せられ、花山院 後鳥羽院の如く、尊貴御躬ら、撰集に當らせられるやうな御方もあつた。又、其が原則であつたとも見られる處がある。所謂師範家は、大貴族の下における藝術傳承の徒とおなじで、執達者・傳奏人と謂つた意味だつたのである。

單なる藝能でなく、既に宮廷との關係密接であり、神聖な技術でありした所の短歌である。宮廷を離れなかつた結果、却て低い代官級の師範家が、之を自由にする形になつたのである。

私の擔任の時代の一番古い時期に當る室町時代で見ても、此事は明らかである。

風雅集の成立から推して見ても、同じ流れの玉葉集などは、謂はゞ藤原爲兼を代官としての、御自選の勅撰集と申すことも出来さうである。

玉葉集が今日よほど見直されて來たのは、同慶である。何分國の文學を見るものが、名篇佳作を埋れさせておいてはならないことであるし、其上極めてよい作品集を、反對に頗わるい雑集と一つに見て居たのでは、昔人の爲にとつて、又一人の國人として、此ほど恥しい怠りはない訣なのである。長い謂はれない屈辱を蒙つて居た此集及び風雅集が正しい價値に立ち直つて來たのを見ると、私ども此集の作者たちの天分を、前々から久しい間讀へて來たものにとつては、肩身の廣くなるのを覺えずには居られない。

新古今集は、優れた選集ではあつた。だが其後代に與へた印象は、わるい側を誇張したと思はれる所がある。——單にわるいと言ふよりは、華にして實のないものを、華なるが故によいと見させた點に多いと思ふ。さうして却て正しく優れたものを、早く忘却させてしまつたのである。さすがに、新古今に近い百年ほどの間は、此よい方面が著しく文壇から認められて居た。

新古今以前から現れて居た純敘景に近い歌は、繚亂たる妖艶の歌風の中に、消えずの燈として明らかな光を發してゐた。新古今代の最後の成功者たる藤原定家の歌にも、末になるほど、此境地はしつかりと擱まれて來てゐるやうである。凡庸人と謂はれてゐる爲家の歌も、敘景となると、見かはすやうな秀作があり、又極めて的確な客觀描寫の届いたものが、相當にあつた。爲家に此作風のまじつて居るのは、勿論前代の引き繼ぎには違ひなからうが、多くは連歌から生れてゐるものと見られよう。連歌における敘景は、歌合せにおける詩歌合せの延長で、從來なかつた印象鮮かな客觀描寫の句を出してゐる。其と共に、連歌の持ち來した拍子は、實に所謂「こまたのきれあがつた」とも譬へて言ふべきものがある。時としては、當然持つべき素材に對して煩ひをなすと思はれるまで、緊張した句法に出來あがつて來てゐる。つまり此形式超過が、何時かは禍を來すことを豫約し乍ら、姑らく歌を進めて行く力の一つになつてゐたのである。

よられつる野も狭の草の かげろひて、涼しく曇る 夕立の空

西行

樗咲くそともの木かけ 露おちて、五月雨霽るゝ風わたるなり

忠良

名作であり、敘景歌として完全に近いものであるが、拍子から來る不安、此ほど緊迫した音律が、却て内容を空疎にしはすまいかと言ふ案じが、つき纏うて來るのは事實である。此は内容に伴うた自然の拍子でなく、其と剝離に際だつて來た調子なのである。一面から見れば、工夫して構へた風景を、過剰した調子で生命あらせよう、とする結果にもなる。最知られてゐる例、

逢阪や 梢の花を吹くからに、嵐ぞかすむ。關の杉むら

宮内卿

花さそふ比良の山風 吹きにけり。漕ぎ行く船のあと 見ゆるまで

同じ人

景を意のままにしてゐる。名高くなつた程、作爲のあとが十分に現れてゐるのである。かうした工夫は、連歌の上で習熟せられた技術の結果であると言ふことが出来る。つまり時代全體として、程度以上に連歌の影響を受けてゐたことになるのだ。

かうして出来た「作られたやうな内容」と、張り過ぎた調子とが、連歌の影響として歌の上に残ると共に、連歌自身はあべこべに、歌其物に此から現れ初める低回調を、受け容れはじめるのである。爲家などの歌の多くは、緊迫感を捨て、たゞごと式に發想する溫柔なものが、新しい作風となつて來た。即二條流の主調である。

あだに など 咲きはじめけむ。いにしへの春さへつらき 山櫻かな

拍子としては、一所これと言ふ中心のない、蕩けたものである。でも此はまだ亡びない内容がある。而も内容が空疎になつても尙、此調子を追求してゐるのだから、助からぬものになつて行く。かうした姿が連歌の、歌からとり入れたものとして後世に到るまで棄てられなかつた。さうして連歌そのものを張りのなくて印象不鮮明な、直觀式には、意味の感受出来ないものに

しあげたのである。

爲家の持つたものの中、此弾力のないものを弾力と感じて多く受けたのが、二條爲氏である。弟爲教も、爲相も、傾向から言へば、以前の敝景風な要素を立て前として傳へたやうである。作風においては著しくもないが、庭訓としてさうした方面へ導いたのが、二弟の繼母・實母である阿佛尼らしく、形の上で見えるといふべきだらう。が、時勢がかうした二傾向を著しくふり分けて居たことも、事實に違ひない。冷泉爲相の作は、大體においては、著しく敝景風で、京極家の歌風と、殆區別のつかぬものが多い位だ。尤、此人は亦曾て爲兼が阿佛尼の教導を受けたやうに、十歳年長の姪爲兼の助力を受けた時代があつたと思はれるから、其も然るべきことと思へる。

第十三代集は、新後撰和歌集であつた。此後、七十年の間に、残りの八代集とも言ふべき新續古今集を除外した七つの撰集が出て居る。古今以來新古今に至る八代集が、三百年の年數の間に、ぼつ／＼に出てるのはよほど事情が違ふやうである。謂はゞ、師範家どうしの間の競争意識が中心に、自然かうした結果を浮び上らせたことになると見られよう。

畏多いことであるが、師範家の上に宮廷がおはして、之に督勵と保護とを與へられたことが、師範家の消長と相呼應して、かう言ふ形になつて出たのが、原因の最大なものである。

大覺寺 持明院、二つの御流れに、二條と京極兩家が所屬し申して、歌道の執達を行ふ形をとつて居た。其が爲兼再度の失脚後、其に作風の近い冷泉を採用遊ぼすのが、當然の事と思はれる。處が、突發風に來る歴史事情は、大覺寺の御流れに親しみ深い二條家を、持明院の御流れの歌の方に近づけて來るやうになつた。此には、其を擁護する大貴族の推舉もあつたであらう。即、勅撰集は、この家で撰進すると謂つた歴史觀が、もう出來あがつて來たのである。一方、吉野の宮廷におかせられては、花山院系統の歌人が勢力を得て、二條家に對して、南山の歌道を絶さなかつた。従つて、歌風から言へば、二條別流の觀がある訣で、新しく師範家やうのものが生れた訣である。宗良親王の下で文學の事に携つたのは、師賢の孫藤原長親——耕雲——であつた。新葉和歌集はじめ親王の御業蹟には、此人のお手助け申した事の深さが察せられる。而も廷臣としての位置は、普通の師範家よりも、遙かに高く上つてゐる。その上、二條家に對する反感が、其歌論に露骨に出てゐるが、歌風は二條流をさまで出ては居ないのである。

唯耕雲の祖父師賢を中心として考へると、吉野朝の仕人の歌風は、敘事式抒情詩と謂つた方面においてのみ、苛烈な境遇におかれたことの自覺が著しく出て來てゐる。併しさうした題材に即したもの以外は、驚くばかり其境涯に無關心な二條家流である。

京都では、二條家の立ち場が頗る浮き足立つて來たことは争はれなかつた。鎌倉の初めにもさうであつたやうに、飛鳥井家が緩衝地帯に立てられて、段々冷泉家の勢力を得て行く氣運が向いて來た。

新後拾遺集が出て、五十六年後、新續古今集が撰進せられたのは、色々な事情を考へさせずには居ない。後に續いて出なかつたのは、世の疲弊と言ふ事ばかりからも説けるが、前の空虛はさう言ふ理由では説明しきれない。師範家たる二條家にその人がなくなつたからでもあり、又師範家同士の競争を要しない時代となつたからでもあらうが、主として、世間の關心が短歌から去つて來たことを示してゐるのである。即、既に連歌時代が來てゐたのである。

連歌は短歌とは、人間條件を異にしてゐた。教へるものは、師範家でなかつた。單なる連歌師であつた。連歌師を擁護し統率する力も、宮廷からではなく、代つて、大貴族自らしたのであ

る。習ふに極めて氣易い文學で、教へる者自ら、頭を低れて家々の門を訪れた。唯歌が何處までも、連歌の元であることを主張したのが師範家であり、又同時に連歌を作つて人に授けた。併し、師範家以外に、大貴族・連歌師の關係が明らかに立つて居て見れば、残る所は唯一つ。連歌の法則は、短歌を基準として、わり出すことの外はなかつた。王朝の歌物語の祕傳の考へ出されたのも、和歌の爲ではなかつた。連歌を學ぶ者の基礎學として、之を遂げないで、連歌だけの範圍では、どうにも動きのとれぬものとしたのであつた。古今傳授・伊勢物語・源氏物語祕傳といふのも、皆其である。此關門を抜けてこそ、初めて連歌の基礎學を學習したことになるのだと信じもし、信じさせもした。

本歌と連歌と兩方を習ふ者が次第に減つて、連歌の方に進む者が多く、稀に連歌師及び連歌を通じて、大貴族に近づきを得た武士たちが、之を行つた。だから初めは、歌主連客であつたのに、何時か連主歌客といふ形になつて、連歌に熟達したと見られるやうになつたものが、本歌にも手を染める、といふ風になつて行つた。

此が文安・寶徳から、天文に到る凡一世紀の間に出來あがつた風習である。事實にはめれば、

新續古今集が出、肖柏・宗長等の生れた頃から、宗長の死、幽齋の誕生があつた期間に、歌・連歌の關係に對する世間の考へ方が、一變して來た訣なのである。

鎌倉開府以來、文學地に墮ちたやうに言はれてゐるが、事實において正しく萌ゆべき處に、芽生えを出してゐたのである。禪僧の將來した學問文學は、容易に影響を顯さなかつた新興階級にも、次第に波及して行つた。武家の子弟が、寺家の預り子として育てられることの多くなると共に、觸れることのなかつた情操に觸れたのである。其が此百年を経る間に、京・東又は他の地方の寺の文化の及ぶ限り、武家に大なり小なりの文化印象を與へて來た。文學圈讀者層を徐ろに作り上げて行つたのである。さうして、京都風の教養を積む爲に、地方の武士は次第に、隱者の徒を迎へて、文學及び儀禮を學んだ。

隱者と一口にいふが、純然たる隱者以外に、公家及びその一流の閑散な地位にある者を含む。此等の知識たちのまづ與へた都ぶりの文化生活の規範は、短歌であつた。さうして後、徐ろに安易な道が開けて行つた。連歌である。之を授けることが、もつと順道なものとして。

二條家が勢力を失ひ、又自らにして歌道の選手を内から出さなくなつたのは、連歌に壓倒せら

れたからである。彼一家及び他の歌道の家々も、歌を師範し乍ら、連歌にも手を染めた。ところが連歌としては、別に次第に、連歌の宗家とも言ふべき家が大貴族の間に生じ、其から連歌師の方へ直接に續いてゐるといふぐあひであつた。師範家が連歌に精進する事は、自ら衰へを促す方面へ向つてゐることになるのだ。既に歌においてすら、吉野宮廷に見られるやうに、大貴族が宗家のやうな形を以て、現れかけてゐたのである。

冷泉家は、師範家としての力は二條の敵ではなかつた。阿佛尼を中にしての骨肉の争から、如何にも對立してゐるやうな外貌を示して居る。又更に京極家と合同して二條家に挑戦してゐるやうな形にも見えた。だが結局わりあひに無事に、二條家全盛時代をやり過し、又勅撰集時代を遣り過した形である。

新續古今集は、形の上でこそ、勅撰二十一代集の最後になつて居るが、事實は此から又、新しく起りはじめようと言ふ決意が見え、又同時に過ぎたる時代の思ひ出に、遙かに打ちどめをつた形に見ることも出来る。聊か趣きを異にした、かう言ふ點に注意せねばならぬ。だが生憎新後拾遺集が出てから、こゝに至る五十年の間に、歌壇・文壇の様子は大きな變化をしてしま

うたのである。

時の波に乗つて居る間は、世の人すべて風を逐うて其門に歸するが、時去れば、人は又自ら、就くべき所に寄つて行く。此間に、勢力を示して來たのは、冷泉爲尹であつた。彼は當時において、師範家としての實力は、却て持つて居た。さうして、傍流として見られてゐた面目を、漸く更めて行つた。東福寺の正徹書記も彼の門流であり、自身また晩年の今川了俊にも教へを受けてゐる。其門人に又心敬があり、冷泉系統には、學者實作家が輩出するやうになつた。さうして遙かに後の、江戸本期の藤原惺窩が、此家から出ると言ふ姿が適當に見えた。

冷泉家の勃興には、殊に地方武士の勢援が力あつたものと思はれる。其中冷泉とも藤谷とも爲相以後稱へて居り、爲満の子爲賢に到つて、藤谷家の實が出来てゐるのを見ても、關東を背景とした事が知れる、さうして、遂に此家を上冷泉・下冷泉と二流を分派させるまでもなつて行つた。而も従來門閥以外に勢力を張ることの出来なかつた歌道にも、連歌における新しい構造が、とり入れられるやうになつて來る。連歌においては既に、連歌師に就いた地方人が、師の認可と共に、其門流を開いて行く風が、初まつてゐた。恰も、時衆・門徒の輩が、宗門を地

方に擴めたのと同じやうに。連歌の興行は、念佛宗の弘法と、殆擇ぶ所はなかつたのである。連歌にはしまつた生活相が、却て短歌道にも反響して來たことは、連歌師が歌よみであり、歌よみが同時に連歌を作つた爲である。若し見方を自由にして考へた場合には、兩者の間、根本かつきりとした形式上の區別がなかつたからである。

了俊・正徹・心敬皆連歌を作つたが、とりわけ、心敬は連歌を本意として居た。だから心敬の門流は、存外に廣つて居た。つまり、從來の師範家をうちつぶす力は、幾様にも生じて居て、更に新しい師家を立てようとしてゐたのである。

三 武家の歌人

一

頼阿が二條家の代官として、歌道に勢力を得たのは、單に文才ばかりからではなかつた。二階堂氏の流れて、隱者として權門に出入したと言ふ事情が非常に、其才を伸べ、其事業を擴げさせることになつた訣である。同時に、彼の二階堂氏における血脈關係の、實は甚怪しいものであることも、ある暗示を感じさせて來る。頼阿歿後、其に當る者として物色せられ、拾ひ上げられた者と謂つた形が、東常縁に見られる。宮廷權門に出入した事は頼阿とほゞ同様で、又彼の暗示したものを明らかにして、系圖を言ひ立て、居た。此も亦半世紀を隔て、さうした傾向の著しくなつた事を示してゐると言へば、其までかも知れない。素暹法師千葉、常胤第六子胤盛の筋で、代々歌人の出た家である。學も、二條・冷泉兩派に通じて、而も二條派の正統を

繼ぐものと見られて居た。二條爲重以來は、傳統は、代官とも言ふべき東氏に降つて來たのである。若し、新續古今集以後に撰集の御企てがあつたとしたら、飛鳥井或は冷泉の後を助けて、曾て頼阿が新拾遺集になしたやうに撰集の儀に與つたかも知れないほどの名望を持つて居た。而も、彼が文學史の上に事業の足跡を印するやうになつた理由は、王朝史の俊成がさうであつたよりも、更に三四年長命して九十四歳まで生き延びたことであつた。たとひ實作力は、彼に劣るとしても、——作物が直に影響しない此啓蒙時代の事だから——此長壽は、彼を完全に、二條冷泉學の傳統者として、大きな存在たらしめた。が、歌道の傳統が單一を守ると言ふ考へから離れて來たのは、彼に大きな原因がある。

古今傳授の歴史において、彼が著しく見えるのは、此兩派綜合と、今一つ、從來露には見えなかつた庶民傳授を行つた點にある。彼は、貴族及び地下の民に對して其を授けた。つまり、學問及び文學の普遍と謂はゞ言へる所に、功勞らしいものを認めてもよいのだ。文明十二年、應仁の亂後の疲弊甚しい京都において、東山で古今傳授を行つてゐる。尤、宗祇に之を傳へたのは、其に數年先だつて居るであらう。

彼が應仁の大亂に遭つたのは、七十歳に垂んとして居る時であつた。此際凡公家は、諸侯の國に流離したのである。藝能を持つ家は、その藝能を携へて行つた。鎌倉幕府の規模が、此時代においてすら、尙理想と立てられてゐた。京の有職を迎へることが、小さな鎌倉實現を夢想する大名たちの風になつてゐたのである。推測すれば、東常縁が二條の傳統を完全に自分の物としたのも、かうした時の退轉から、長い歴史を忘れる方に傾いてゐた二條家の末流をして、すべてを放擲させてしまつた時勢が、さうさせたのであらう。

若し常縁の後に、之に替る筈の者を求めれば、太田道灌を挙げねばならなかつたであらう。だが彼は常縁よりも遙かに若く、又その歿年も亦彼に先んじて居た。だが其も、今日からの考へであるかも知れぬ。なぜなら、關東管領配下の大名として、父子二代の文雅の才を都人たちが珍重がつただけで、本格として認めて居たものとも思はれない。學問文學においても、都に居ないものは、本流となり得ない世であつたのである。

短歌は、此時代において、まことに危いせつばに臨んで居たのであつた。歌の傳統者は諸國に流寓し、見とほしもつかなかつた時に、常縁が飯尾宗祇に之を傳へたのは、行きつまつたから

の決断であり、又焦燥に驅られた亂離時代の人心を肯はしめる。此後百年慶長の川邊籠城の砌、細川幽齋が、古今傳授を失ふ事を虞れて、開城したのも、尤と思はれる。時代は一世紀を経て、世態を通覽する眼は進んで居ても、尙其様であつた。まして文明年間、應仁大亂直後の世間である。其は、あるべきことと思はれる。傳授のみが大切なのではない。傳授を失ふことが、古今集及び伊勢・源氏等の、貴重な文獻の意義を晦冥に歸せしめる事と、信じて疑はなかつたのである。と言ふよりも、もつと具體的に寶物を亡してしまふといふ、深い憂ひを感じたに違ひない。庶民の間にも、此傳統が残りさへすればよいと言ふ氣になるのは尤である。さうして最適切な受けてとして、隱者といふ形があつた。

さうして此常縁の方針は、誤たすよい結果を、遙かな未來に持つことが出來た。公家と町人と兩方面に分けて傳へた、和歌及び和歌を説くべき方法と信じられた學問が、遠く江戸期に入つて、正しい成迹をあげ得たのである。

和歌は、學問と考へられて居た。其を作る事は、漢文漢詩を作る事を遊戯・藝術と考へずに學問の一つに考へた如く、一つの學問であつた。さうして我々が今日考へる和歌の上にある所の

學問は、當時の人にとつては、學問を遂げる爲の鍵であり、理論であつた。此理論を知らねば、和歌なる學は知ることは出來ない。之を失ふことによつて、和歌は從來積み立てた代々の解釋法と、作法と、兩つ乍らしくしてしまふことになる、と考へたのである。我々にとつては、——と言ふよりも、倭學國學の分岐する江戸期においてすら——別な解釋法を發見することによつて、さうした單純・迂闊な理論の有無などは問題とすらせぬことになつてしまつたのである。が、古人にとつては、其理論は更に、信仰をさへ添へて居た。さうしたものを失ふことは、之を持つものにとつては、大變な事だつたに相違ない。

今日の我々にとつては、連歌と和歌とは、其態度方法において、全く別な文藝に過ぎないが、古人にとつては、基礎における様式の同一性が、どこまでも、此二つを離して考へさせなかつた。連歌の母胎は短歌だつたので、其から分化した藝術が連歌だと考へてゐた。此考へ方までが、正しいものではなかつた。だから、歌よみ及び苟も歌道の師範家ともあるものが、連歌にうき身をやつすことも不思議ではなく、又連歌師が歌を作り、尠くとも亦、歌を作るといふ立て前を持ち續けた理由も、知れるのである。だから、和歌の理論であり、主要知識であり、又

主題である所の傳授秘傳を、連歌師が誇りとする事も、當時としては理の當然である。

宗祇が、古今傳授を受けたのも其訣であつて、同時に連歌師の手で、ある期間、ある部分まで、短歌は守られて來たと言つても、さし支へはない筈である。

一子相傳であるべき筈の傳授が、血族を離れて、學統の直系を意味するものとして授けられるやうになり、一應町人の手に降りた古今傳授は、三條西實隆に宗祇から傳へられるやうになつて、再姑らく公家に戻つた。さうして、譲るべき人を待つやうな形で、三條西家に保留せられて、公條から、實枝といふ風に傳つて行つた。

二

此頃の師弟相承次第は、嚴重であるべき筈だが、傳統以外にも、臨時の指導を受ける事は、さし支へはなかつた。傳統として出来るだけ系圖正しい師範を擇ぶが、一時の師としては誰に道を聞いても、師と助力者との區別は、自らにして立つてゐたのである。時としては、助力者の方が有力に働いて居り、師は傳統上だけ名義を授けるに止る、と言つた形を取つて居ることもあつた。

地方土豪にして、廻國の連歌師・歌よみから手ほどきの教習を受けても、後には、京の師範家に弟子入りするのが、原則としたのである。

隱者は諸國を漫遊して、京都文化を撒き散すが、結局收まる所は、京都の師範家と言ふ形であつた。謂はば諸大社大寺の御師みしとも言ふべき廻國文學者だつた。

其著しい例が、近世短歌史の東雲時の代表者とも言ふべき太田持資入道道灌にも見られるのである。道灌は、父資清以來、上方文化に憧れ、歌連歌に好みを深めてゐた家に人となつた。だから、廻國の雅人の口によつて、京地にも、彼が文雅の才あること位は、傳へられて居たであらう。傳統としては、飛鳥井家の門流に屬して居た。京に使を入れて許しを請ひ、新續古今集の撰者雅世の子雅親から、統を傳へたことになつてゐる。藤澤の今川了俊、又心敬僧都などは父子二代にわたつて、彼の師だつた、と見てさし支へはないだらう。

彼の作と傳へられるものには、ある種の主題に似た露骨な意圖を持つたものが多い。又其だけ啓蒙として短歌の趣味は、人に感受せられ易いものを含んで居る。

一體武家の歌は、王朝末の武官の作物にすら、既に相當に趣向と、情趣とが絡みあつて、簡易な一つの主題らしいものを持つたのが多かつた。賴政がさうであり、西行のあるものがさうであり、秀能のが又さうであつた。武官の歌の鑑賞法と謂つたものが、凡備つて居たやうに思はれるのである。一氣呵成と謂つた風に出来て、而も其間に思想の折れ目において、外的にも強い曲折を作つてゐる、と謂つたものであつた。首尾交錯したやうな幽玄調とは違つて、的確に表現するだけに、印象鮮明なものが多かつた。思ふに、若干寺家の歌風と相通する所があるのではなからうか。この主題を寓する態度は、長く残つて、短歌の本質の一面であるかのやうにさへ、見えるやうになつたほどである。

殊に道灌は、此期の冷泉風の影響を受け、又連歌式表現を以て人の興趣を繋ぐことを知つてゐただけに、何處か、拍子にはでなをどりを持つて居る。

かゝる時 さこそ命の惜しからめ。かねて なき身と思ひ知らずば

かうした、讀者を身に近く感じながら作らると謂つた抒情詩が、殊に武士の「述懐」には多かつ

た。かう言ふ境地は、次第に文學を離れて武士の中にのみ止つて、武道歌と謂ふべきものになつて行つた。ちやうど寺家の歌が早くから、讚歌から道心歌になり、又道歌になるやうに向いて居たのと、傾向は一つである。

彼が歌合せを喜び、連歌を愛したのは、當時の地方土豪としては、稀有の事ではなかつたであらうが、其もありふれた程度と、見ることも出来ない。此から時代が進むと、其も普通の事となつて來た。又その才能も、末流文壇において、十分に發揮の出来る理由のないことを、考へに入れてかゝれば、まづ相當な才能ある人物だつた、と見てよからう。だが、都會人士の田舎びとに對する見くびりから出發した過褒讚辭も、わりびきして見ねばならぬ。道灌が世に傳へられたのは、固よりさうした境遇からではあるが、同時に、實際洗煉すれば、相應な位置に達することが出来たらう。さういふことは考へられる。

四 歌風の流れ合ひ

二條家と冷泉家とは、元々歌風において若干の違いを見せてゐた。冷泉の絳景を主として、調子の張つてゐるのに對して、二條は抒情を主に、調子の立たず柔軟に連綿してゐる、と謂つた曲調をしたて、ことを目標として居たやうである。

末期二條派の代表的なよみぶりは、最著しいものとして、才人頼阿の草庵集を見るが早い。歌人自身の生得のものに據る外はないやうな、何の計畫もなくして、自ら個性の流れ出て來るのを期待するやうな拍子で、内容はたゞごとであり、形式は平穩・流暢であることを狙つて居たに相違ない。つまりさうした處に、古今の歌の音律の特徴があると見たのである。だがかうした態度にある限りは、極めて稀な歌人の出現を期する外はない。生得の上に、氣分と境遇とが、頗關係して來る。たとへば、型は小さいが、江戸の良寛のやうな人を俟つて初めて達せられるものを、すべての人に望んでゐたのではないかと思ふ。だから、類型表現も苦にはならなかつた。

唯當然、ある作者の性格・經歷・境遇などが、實作物の上に附加せられて、聯想上の價值が増して來たであらうと思はれる。だから、頼阿を知つて、其を作物の背景とし、註釋とすることによつて、價値は殖えて來るのである。草庵集を見て失望するのは、之に望をかけ過ぎ而も鑑賞法を知らぬ後人にとつては、あたり前である。必しも過去の二條派の歌には限らない。歌の上には、いつもあることである。

冷泉派は、出發點において、歌風を異にして居たことは固よりである。かうしたむつかしい獨立の爲には、京極爲兼といふ偉才が出て道を開いてくれたやうなものである。つまり出來るだけ、二條派と自ら區別しようと言ふ努力があつた。だが、あゝした専ら個性に據らなければならぬやうな客觀描寫と、緊張した拍子は、常に誰にも望まれるものではない。だから多少づつの新味は残し乍ら、次第にやはり平凡な無感興な類型内容を、類型形式に表現して行くやうになるのは、當然である。唯時々、纒かな救ひとして清新なものを出してゐる位の程度で、多くはやはり、安易な二條派風なよみ口に近より流れて行く。而も、連歌から輸入した表現法は、頗内容と關係のない千篇一律の平明無味な拍子である。どうしても、歌の趣く所は知れて居た

のである。だから二條派は、歴史事實として、痕を潛めてしまふ世になつても、歌風はそのま
ま傳つたと同じ事である。

譬へば、下冷泉派の政爲の碧玉集を見ても、もう既に爲相などの歌風よりは、二條派風に近い
ものになつて居る。と言ふよりは、草庵集の影響をとりこんで、新しい時代を迎へようとして
居る痕が見える。だからまして、實隆の雪玉集などを見ると、明らかに二條風が見られる。廉
あるべき所を、強ひてかどをかきとつたやうなもので、冷泉流のとりえである、凛として張つ
た部分がなくなつてしまつてゐる。

三 江戸時代

一 細川幽齋

鶯の來鳴く砌ミヤリの 夕日かけ。むら／＼なびく 窓のくれ竹
風わたる洲崎の蓬 冬枯れて、夕霜白き彼方ウチの川波

かう言ふのを見れば、大體に於いて、冷泉調の盛んだつた頃の作風である。唯、二首とも第五
句が實感を逸したそらくしさを持つて居る。つまり調子がまどかに捲きこんだやうになる點
である。此は連歌の習熟から來るもので、ある調子の緊張はある。内容においても、約束以上
には出ないが、敘景法のかつきりしてゐるのは、やはり其影響である。

歌そのものとしては、かうした作風が幽齋の常の傾向だと考へることは出来ない。極めて稀にまじつて居るもので、さすがに純粹な二條派風と言ふものすら、存在する事がむづかしくなつた時代を、示してゐる例に過ぎない。

其時代においてこそ、唯一の傳統繼承者である。だが其は、文學の眞髓を受け継いだと言ふことではなく、唯の系圖を正しく傳へたと言ふまでであつた。而も彼に古今傳授の形式によつて、歌道を傳へた三條西實澄自身が、大作家でもなかつた。其上に、彼も亦才において、歌に優なるものを持つて居たと言ふのではなかつた。精神傳承であつて、謂はゞ、受けとる個人の才能によるよりも、外在する威力が、ある人に附與せられることによつて、何等かの變化を來すものと豫期した時代のひき續きである。だから譬へば、古今傳授によつて來憑する歌魂を、空漠と考へたまでだ。さうしてまた適當な人に譲り渡すまでの、暫定風な預り主としての意味も考へられるのである。

慶長六年、桂ノ宮智仁親王に幽齋古今傳授を申した時は、年六十八であつて、歿年に先立つこと九年。此年連歌の先輩紹巴は七十五、昌叱は六十三。後輩では貞徳三十九歳であつた。更に

幽齋の生まれた年を準據にして見ると、宗祇歿して三十三年であり、宗長死して追善千句のあつた後二年に當る。三條西實隆八十、宗鑑七十、守武六十二であつた。この七十年程の間に、連歌を嗜んだ人々が、再本歌の格式を學ぼうと欲するやうに、世の文運も凡前途に光明を認め出してゐた。さうして次第に、連歌師に保存せられて居た短歌及び和歌の學問も、一つの専門として獨立しようとし初めたのである。だから、幽齋を以て、連歌と短歌との分岐點にある人、其門人貞徳に到つて、明らかに連歌門が短歌から分立したと見ることが出来るのである。彼の武家としての行蹟は、寧ろ文人或は武將の御伽衆の優なる者としての聲名の裏に、隠れてゐる。信長・秀吉に事へ、又家康に眷かれたのも、之によるので、其ほか公武貴顯の間に多くの門弟を持ち、江戸の日本の學問文藝の權輿のやうな形を備へたのも、一つは室町將軍家以來の高家格に準じて見られた所があつたからである。十五代義昭將軍以前から、幕府に仕へて居た。恐らく幼少で、既に同朋のやうな務めに出仕したのであらう。義晴將軍の落胤だと言ふ説の是非は訣らぬが、かう言ふ風聞の散るほど、彼には室町幕府の色彩が濃かつたのである。將軍家の格式を學ぼうとした信長以下の武將にも側近し、戰陣にも従ふやうになつたのである。かう考へ

て來ると、彼の戰國末から江戸へかけて、第一流の文學者として認められた理由は決るし、同時に極めて雜然とした内容を持つた彼の文學である。

幽齋以外の傳統正しい歌人はまづ、冷泉爲滿を擧げねばならぬ。幽齋四十歳の天正元年には、まだ五つであつた。多少二條のたゞごと體よりは、印象風な作風を持つて居るが、其とても、大したことはない。上冷泉の傳統は、此人、家康の爲に古今集を講じたと言ふ歴史によつて、後々に引き續き、爲持（安永三歿六十三）その他を出してゐる。

爲滿と同年に歿して、五十九歳であつた藤原惺窩は、下冷泉家爲純の子であるが、近代の傾向として儒學の方に進んだ。而も、其子爲景は、爲將の後を承けて和歌の統を繼ぐやうになつた。此事も、當時における學問に對する考へ方を見る上に、大切な事である。

幽齋に統を傳へた三條西實澄の孫實條は、再彼の傳授を受けた。何と言つても、三條西系が最廣く京都派の和歌に働きかけ、又此系統にあることを誇りとしたものと見えて、後々までも、民間の歌人は多く此門から出てゐる。此は一般の論であるが、個人として見ても、澄月・夢宅・

伴蒿蹊は、此筋の出である。香川景樹も亦、此派の清水谷家に學んだ梅月堂一家に入つて、一家をなしたものであつた。此外にも、飛鳥井の傳統は、久しく續いて來た。唯優れた人を出すことなく、其古い名によつて、大名の間に、多くの弟子を持つたことが、目をひく位に過ぎない。

中院通勝から傳つた中院流、鳥村光廣から出た鳥丸流も、皆系統上、幽齋の流れである。三條西から分流したものには、清水谷流・武者小路流などがある。

京或は地方の人士の、傳統の末に列ることと、歌を作ること、及び歌人として公認せられることを、一つと見なした時代である。だから、其々贊を執つて門下に參じたのである。其等の間には、思ひがけない學者たちも、多くまじつて居る。此等は、さうした事によつて、學問を得たと言ふより、學者としての領分を持つ爲に、さう謂ふ形式を履んだものと見るべきであらう。

二 地下の歌人

さう言ふ傳統を全く無視して出た、歌人學者のあるべくも見えぬ世間ではあつた。だが若干、尙別に微かな流れが、過去から續いて居て、別派の歌人が現れなかつたとは言へない。即、堂上の傳統以外にも、流派とは言ふべくもない歌の家と謂つたものが、諸國にあつて、短歌再興の時代に、頭を擡げて來た。さうした時が時であるから、時流を逐うて、新しく歌道の家の點を乞ふやうな者も出た。つまり配下となつた訣である。神社及び寺家において、殊に其が見られる。

幽齋死後七年元和三年、渡會延佳が生れてゐる。彼の學及び歌は伊勢のもので、恐らく住吉・加茂その他の社々の社家に傳へられた法樂神樂歌系統の作物の、さらに複雑な徑路を経たものと思はれる。荒木田氏などの傳へるものと、自ら區別ある點から見て、殊にさう思はれる。彼の歌には、特にとり立てゝ言ふほどの價值もないが、唯、拍子から見ると、神樂歌調とも言ふ

べき、唯にのつて諷誦せられるやうな、如何にも即興歌らしい拘泥のないものが聞える。

吉川惟足の如きは、中年から這入つた宗派神道家で、當時の所謂「神道者」だから、歌は別に特殊な徑路を通つたものとは言へない。

時は遙かに隔るが、延佳歿した年廿二の若者であつた春滿の「我等、中院殿・清水谷殿などにも弟子になり申さず候わけも、家傳を一つ興立申度所存候故、个様に歌すき候へども、公家の弟子に成不申候」とある書翰も、家傳は其父以前からの傳統を言ふのやら、自ら新しい流を開かうと欲したのやら、も一つ明らかではない。が、公家風以外に、流派を立てる素地のあつたことを見せてゐる。即、神官家には、又一つ歌風のあつたことを示してゐるのだ。

おなじく長袖と謂はれても、僧侶は隱者と共通の所が多い。其故、此部類に入る人たちが少くなかつた。寺家は鎌倉以來、詩文の造詣が深くなつて來てゐるが、やはり短歌を棄てないものが多かつた。と言ふよりも寧ろ、寺家の生活と歌との結合に、放されぬものがあつたのである。西行などの純文學式に進むのもあつたことは勿論で、五山の傑出した學僧の中にも、清巖（正徹）の如きは、其傾向に著しかつた室町期の歌人である。併しもつと生活に即したよみ捨てを

恣にしたと言ふより或は、時としては讚歌、時としては骨折れぬ述懐として此形式を擇んだ、明惠亞流の歌よみに一休がある。此類の人々の作物には、まじめなものもあり、剽軽頓才を寓した誹諧歌に近いものが、出来るやうにもなつて行つた。

寛永十六年に死んだ藝壇の鬼才瀧本坊昭乗を中心として、石清水流の狂歌の發達した徑路も、やはり考へれば、突然ではない。延いては鯛屋貞柳が隱者として、此系統の古狂歌の態度を大成するに到る順序も、頷かれる。

此傾向で稍、文學味を持つてゐるのが澤庵で、兼ねて五山系統の短歌の末に位するもの、と言ふことが出来よう。さうして短歌を簡明な教誨の方便にした道歌意識も亦十分に見られるのである。嚮に述べた武邊流の述懐歌が、末には此と流れ合つた。つまり兩系統の隱者の中に立ててである。此態度を後來の禪僧等が文學式に完成しようとして、幾度か失敗した。其ほど僧侶の生活氣分は、短歌と本質上そぐはない部分があつた。

此時代の僧侶は、政治家以外に、社會文化事業に自然關與せねばならぬやうな地位に立つて居た。澤庵其他のした事業を、宗教文學などの、個人的な爲事と比べて見るのも、一つの考へ方である。

昭乗よりは十七年、澤庵よりは廿三年、其歿年に先んじて生まれた後輩に、元政がある。短命で四十六歳で亡くなつて居るが、二十年遅れて生まれ、二十六年後に歿した五十一歳の芭蕉と境遇までが似て居た。謂はゞ其先型とも言ふべきであらう。二十六で、彦根藩を脱して深草に隱栖した。芭蕉ほど俗世間の人と伍しての暮しを續けなかつた爲、人生味においての變化展開は著しくない。

歌道師範の家々や、連歌師の間には、流動しない知識を傳承してゐる間に、學問も歌も、其等の自由な發動を見る前に、既にある點まで發足點は作つて居た。日本古典學は必しも歌道によつてばかり存して居た訣ではなく、神官家や寺家の間に、日本紀學が傳り、之に新しい悉曇シツトムの語學—科學的な—研究法が加勢した爲に、自ら多少の形は出来かけて居たのである。さうした人たちが、歌道・連歌道に傳る訓詁學に觸れるや、直に雜然たる傳承知識を排して、その學の先まで見透してしまつたと言ふ所がある。

文學においてもさうである。

元政の如きは、まだ作物が、文學と知識との間に浮遊してゐるが、其觸れようとしてゐる所は、個性の發露にある。貞門に出入した彼にしては、珍しいことだ。

かうした隱逸文學者が、存外俗世間と深い交渉があり、其文學を轉換させる力になつてゐることとは、大凡に見ることが出来ない。

おなじ隱者にも、もつと豪華な生活を送つてゐる者が段々ある。さうした中の隨一人として、木下長嘯子が考へられてゐる。此人こそ元祿期の優隱者の理想で、而も前代以來の闊達の氣風を保つてゐたものと言へよう。が、何も彼一人が、さうした生活と文學との前驅者ではなかつた。國々の諸侯にも、連歌及び短歌に修業を積んだものが尠くなかつた。近くは幽齋、又高い所では公家を師範と頼んだ外に、皆其々御伽衆の中に、相應な歌人連歌師を養うて、之が加筆教授を受けてゐたことは察せられる。さうした御伽衆自ら前代以來の隱者であり、武道文學の徒であつた。だから當然諸侯の歌は、後々までも其等の人々の手の、加つたものが多いであらう。此點作者として見るより文學、擁護者として見た方が、適切かも知れぬ。

島津義久・伊達政宗の如き大名を初めとして、名を擧げる遠のないほどである。

三 木下長嘯

古人の、歌を愛誦する態度は、今我々がするやうなものではなかつた。一首の傳ふべきものがあれば、其によつて、ほど作者として價値がきまつたのであつた。さうして其集の中、更に數首も優れたものがあれば、如何に凡俗な作品の數十百首で圍繞せられて居ても、其作者としての位置は動かなかつたのである。吟誦して傳へられるに堪へた歌が出来たと言ふ事が、歌人の値うちをきめたのである。其ほど凡庸な多くの作物を見るに馴れ、其だけ又、其中にまじる清新なもの——と言ふより類型の元となるものの存在を、非常に高く見る傾向があつたことを考へないでは、我が國における名歌と傳へられるものと、名歌の作者との關係が會得しにくいのである。

長嘯の歌の如きも、今日見れば、何を其ほどもてはやしたか合點の出来ないものも多い。而も世間耳食の人々だけでなく、古典文學に新しい學問と藝術との立ち場を見出した下河邊長流・

僧契沖すら彼を尊敬し、——と言ふより、長嘯子の名の傳へられる原因の大いな部分は、此二人の推奨によるとも謂ふべきであつた。——又彼を出發點とさへして居る所の見えることから考へると、自ら、昔の批評の標準に思ひ到らざるを得ない。

彼が五十六歳になつた寛永元年には、長流と北村季吟とが生れて居る。此半世紀の遲速は、戰國と泰平との差異である。作家・學者等の内界に非常な變化があつたことは、考へられる。而も生前に評判のあつた豪快な隱者なる、此先輩の歌の價値を、今一度糺すだけの年月のゆとりが、其間に流れたのであつた。長流の如きは、恐らくその名まで、長嘯を模したものと謂つてよく、長嘯は更に速く、日野方丈の長明の名の字を襲いだものと見られる。此三人の間に、隱者文學傳統を示す、ある誇りの持たれて居たことが察せられる。

曾丹・俊頼・爲兼を立て、言ふのは、冷泉流のまだ健康な作風を持して居た時代の風である。長嘯も亦、其流れを學んで、善惡共に二條末流全盛時代として見れば、異風な作品として目についた。彼以外にも、さう言ふ作風の人はあつたのであるが、傳へられるに足る位置と、注意を惹くだけの物は、でも残して居たからであらう。

里は荒れて、燕ならひし梁ウツバの古巢 さやかに照す月かけ
見わたせば、山もあらはに年くれぬ。しづが門松 今や伐るらむ
思ふどち 一日もうとく過さめや。いつと定めぬ世のはかなさに
枝も葉もかぞふばかりに 月澄めば、かげたしかなる庭のときは木
音もせず 春日のどけし。時守りの鼓や 今日ほうち忘るらむ

まづ此等は、此時代として相當、類型を出てゐるものであらう。

鳩の鳴く外面ソトモの杉の夕霞。春のさびしき色は 見えけり
鶯の聲のひゞきに散る花の しづかに落つる 春の夕ぐれ
冬枯れのこすゑを 松に吹きまぜて、こまかにかはる風の音かな
静かなる庭の木の間にかげ落ちて、夜深き花に月わたる 見ゆ

の如きは、新舊いづれの立ち場から見ても、よいものと許される筈のものである。

其新奇を銜うたやうに見られるものも、時代を離れて今日になつて見ると、清鮮な味ひが缺けて居る。古風で硬い感じのするものと、全く世俗風な大衆味の多いものとの、新舊の感じが違ふだけで、等しく同じ古さになつてしまつたのである。併し其間に、技工としてある緊張感を持たせるものが新しく思はれ、技工がひのない類型式なものが、古いとせられる訣である。彼の作物の中にも、舊風なものが多い。さうした作群の中から、とり出された幾分の一かの技工式な作品や、又稀にある玉葉風雅に近いものが、新しいと見られるのである。さうして其は、新しさ優れた正しさを持つものと謂つてよい。

風そよぐ竹の下道 わけ過ぎて、雪に宿かる足柄の山

はるくくと 鳥羽田の末をながむれば、穂なみに浮ぶ 淀の川舟

此等の歌の持つと感じられる新味は、公式にはまつた所があつて、自由がない。當時は新しく

感じられたであらうが、ある類型を思はせるだけの古みが伴ふ。淀の川舟の方は、形式に囚はれた古めかしさを示してゐるが、事實は、風そよぐよりも生きてゐる。即歌を通じて、歌以上のものが思はれるのである。彼の作物中數へきれないほど、多く此種の草庵集式な歌がなく、又必しも草庵集風な物が多い訣ではない。さうして純自然描寫と見えるものがあつても、どこか確實性がない。つまり、才氣と野心とを露骨に見せたものが多い訣なのだ。

だが此は、此人だけの性格によるものではない。彼が自ら態度とし、其態度の代表者とした鴨長明及び其以後の隠者の持つたものが、皆其であつた。世の中に對して、常に優越感を持ち続け、知識と才氣と剛愎と、さうして半面に、世俗的でない生活面をも持つて居ることを誇示する、文學者の一つの傳統である。

彼木下勝俊は、豊太閤の北政所の兄家定の長子であり、小早川秀秋には兄。此兩家は共に亡びたが、次弟利房三弟延俊の後の木下氏は、今も存続して居る。利房の末に、木下利玄が出たのも、何か誘導があつたのであらう。世説では、秀吉の愛妾松の丸と先夫武田元明との間の子だと傳へる。關原合戦に先だつ伏見における彼の進退は、後世にも非難せられてゐる。秀秋の

關原の態度程大局に關係はないが、軌を一にすると見てよい。他の諸侯において、進退の目に立たぬことが、豊臣氏の近親だけに、衆人環視の前に著しく目立つたのであらう。之を思へば、其態度には世人の解釋するよりは、自然なものがあつたのかも知れぬ。而も東山靈山、後に、嵯峨或は大原に住んで、安樂な生涯を終へることが出来たのも、叔母北政所若しくは、松の丸の心入れによるものと察せられる。公家・大名・學者・連歌師・僧侶・茶人・富豪・隱逸などと交つて、恣に世を送つた。かうした境涯から出るものは、豪快な文學でなくて何であらう。さうでなくとも、所謂桃山時代と謂はれた闊達な、富饒な生活が生み出した藝術の間に居た人である。其作物が、其まゝ典型としての隱者文學であつたのは、當然すぎることであつた。

一方、利休が代表してゐる如く、當代の藝苑に遊んだ人が、己を以て典型とし規矩として、敢へて昔の型に重きを置かなかつた氣風の充ちて居る時勢である。彼の歌における優越感が、寧ろ放恣な思はれるほどに出て來て居るのも、理由のあることである。其が、歌は爲兼以前に學ぶべきことを知つて、其格を破つて自在に遊ぶことを知るやうになつたのである。彼の歌のあ

るべき訣は、此にある。

夕顔の咲ける軒ばの下涼み。をとこはてゝれ。女はふたのもの

右天下至樂也。有_ラ誰_カ如_ク之_ニ。

かたぶきたる酒とつくり、瘦せ僧と言ふ名をつけて

なれよ汝。汝はやせ僧。時にあはず 頸うち投げて、もの欲しげなる

文殊院にて、朝の眺望と云題いだし給ふこと有ければ

もの申し、歌よみ たうべ むすぶ句に、今朝のもじこそ冬の眺望

九月十三夜

わがものと 大和もろびと誇り見よ。外に知られぬ秋の夜の月
一色に玉敷きかへて、天地の またひらく世や。雪の曙
今日の佛。花たてまつる。この枝におきあまる露は いかゞ見るらむ

すべてたゞ、これ皆秋のすることぞ。月も ゆふべも 蟲も 憂からず

九月十三夜

名に立てし怨みも はるゝ今宵かな。月と言へば雨 花といへば風
すべて人を 如何なる時にしのばさらむ。あはれ日又日 あはれ夜また夜

歌匠の歌らしい平俗な歌口、無學な語の斡旋に飽いた隠士の中に、かうした作風のとりあげられたことは言ふまでもなからう。だが一方又、別の俗氣が頭に出て來てゐるのは是非もない。長流・契沖が、大きに長嘯子々々と唱導したのも、理由は明らかである。

併し彼の歌は、一步すれば轉び落ちる危い崖を渡つて居るやうな所があつた。之を救ふに適度の文學意識があればよいのだが、彼の文學——と言ふより、隱者等の懐く文學心は、別殊のものであつた——は、和歌の本質から逸出ししようとするものがあつた。高邁なものを欲して居た。無執著貌を希つて居た。其が多く煩ひをなした。さうしてむやみに、居丈高な壓倒風の物言ひをした。其で、著しく當時流行の抽象辭に輪をかけたこけ嚇しに過ぎぬやうなものが、無際限

に出て來た。さうした結果は、やはり當時の歌についての知識の限度を越えることが出來ない。爲に、無内容な觀念風な作物が多かつた。内容あらしめようとすれば、語が別の思想の橋渡しにはたらくやうな、懸詞縁語でなければならなかつた。さうして此が、戀の懸け合ひなど言ふことを離れて、文雅の徒の實用に使はれることになる、結局は、互に心憎がらせようと言ふ狂歌・誹諧歌に奔るのは、言ふまでもない。夕顔以下の歌でも既に其に深入りしてゐる。

をぐるまの廻りて 空に行く影も、 曆の軸にうつる年かな(歳暮)
ぬひ著する今宵の雨のいとも憂し。 空ゆく月の雲の衣は(九月十三夜)
しばしとて、 木火土金をかりの身は、 誰か一度かへさざるべき

(黄金をおこせければ、返しつかはすとて)

此等は全く古風の狂歌である。緊迫した所のない調子が、鯛屋貞柳以前の格だつたことを示して居る。江戸時代の狂歌の古風のもの、石清水社僧の間に榮えて、京大阪に根を張つたもの

高臺寺にまうで、豊國明神の像を拜して

なきかけにまた袖濡れて、仕へけむ昔を今のしづのをだまき

70

「杉原彌助」の子家定の子であつて見れば、秀吉立身に連れてなり上つた一族である。土民の傭兵として武力を持つて居た者の多かつた時代だとは言へ、類に牽かれて家をなした者の中には、さして兵事に馴れなかつた者もあるだらう。家定の子等の中には、さうした者もあるのは、當然である。兄弟共に武名において缺ける所のあるのは、不思議はないとも言はれよう。事情は事情として、根本にやはり、武將としては、膽の据らない人であつたのであらう。が、文人としてはさすがに、放膽な所もあり、他人の之を遇することも特殊であつた爲、作物は自然、寛闊なものとなり出でたのであらう。

漢籍千五百卷、國書二百六十部を、隠れがに貯へたと言ふ彼は、歌集又は歌文集として、若狭少將勝俊朝臣集・舉白集はあるが、別に研究書を殘して居ない。が、其弟子山本春正は、徳川光圀の萬葉註疏事業の初めとも見るべき企てに召されて水戸に下つて居る。勿論系統立つたものではあるまいし、亦學統も長嘯を承いだとも定められないが、多少彼の學問傾向を窺ふ手立てにしてもよい。更に春正よりも稍遅れて——と見る方が正しからう——おなじ事業の爲に、迎へられようとした下河邊長流は之を辭し、註疏の事だけは受諾した。此が延いて、契沖の萬葉集代匠記撰述に到るのである。春正の水戸下りを、長流の招聘よりも早いものとすれば、此二人の間に、長流・契沖の間に行はれたやうな推舉があつたかも知れぬ、と言ふ想像が起る。長流が長嘯に傾倒したことから考へれば、此師承を明らかにしない隠士下河邊氏の上にも、何か、文學上の傳統が考へられさうに思ふ。

短歌の上から言へば、當然二條末流の歌が、一部具眼の人々から排せられる筈の時になつた。さうして、眞に偶然生き残つたと言ふべき冷泉流が、自由な作家を擁することになり、之を唱導したのが、長流・契沖であり、其對象として擇ばれたのが長嘯子であつた。而もその導きとして、更に長嘯・長流の間に、何か系統上の關係があつて、さうした機縁を濃くしたものと見る方が、一層適切らしい氣がする。

畢竟、彼だけの地位に在つたものが、一擧にして處士となり、自在の境涯に入り、而も欲望を

71

矯める不自由なく、欲すれば有るといふ隠者の理想を實現した生活であつた。だから、彼の歌は正當に評價する人も多く現れ、又正當以上に受けとられることにもなつた。而も、彼の時流を棄て、冷泉流についたことが、何よりも正しかつた。其と同時に、彼が爲兼を目標とし、更に爲兼の尊敬した曾根好忠・源俊賴の歌に注意を向けるやうになり、其處に製作せられるものが、歌の本質に最叶うたものとならう。其點において、彼は作物よりも、態度においてよいものを持つた。其よりも、よい態度を後人に教へたと言ふ方面に、もつと彼の存在の意義がありさうである。

彼の認められざるよい素質を、歌を以て示したいと思ふ。

はふれけむ身もはづかしく 門さして、暮れ行く年にあはじとぞ思ふ

歳暮

やどりをば 明けぬと出で、雪も 夜も深きにまがふ野への旅びと

深夜雪

なか／＼に訪はれしほどぞ 山里は人も待たれて、さびしかりつる

ある人ほど久しくとはざりし時

ぬしなしと 花をや思ふ。雨そゞぐ櫻が枝にかゝる みの蟲

老いらくの世もうく 人もなさけなし。さもあらばあれ。幾ほどの身ぞ

起きて見る霜夜の月の かけ清し。人はしづまる闇のとぼそに

園過ぐる嵐の後は、音もせぬ木の葉につぎて ふる涙かな

思ふどち ひと日も疎く過さめや。いつと定めぬ世のはかなさに

なき數に入れてや 人のかぞふらむ。生くるこゝちもせぬ うき身かな

舉白堂にて、子どもなど、彼此つどひて遊びけるに、紹三の事まづ思ひ出で、

遊ぶ子の數にも入らで、君ひとり 苔の下にや 今はなげかむ

まづ悲し。花を見 月をながめても、そのおもかげは、ムカヒトうかび消えつゝ

吉野山 花見に行かむ出で立ちも、宿の櫻に思ひとまりぬ

態度は冷泉であるけれど、歌風はなほ二條派の長い影響が、此人の上には残つてゐる。歌その

ものが、二條派の主題（氣分）を離れては考へられなかつた時代なのである。作る時の構へとは、自ら對立して、こんなものが、彼の歌の調子のある部分まで規定してゐる。彼の歌は一口に言へば、連歌の氣分・詞遣ひが、纏綿してゐる。不世出の大才と言ふほどではないが、此時彼が出たと言ふことは、歌にとつては幸福であつた。後輩の言あげの爲に、大きな心頼みとなつたのである。

彼の門下——と謂つても學も文學もすべて、彼から學んだ訣ではなからうが、——としては、普通下のやうな人々が數へられてゐる。

山本春正

(?)
冷泉爲景—木下長嘯

清水宗川(↑飛鳥井雅章)

安藤爲定(↑冷泉爲景)

立詮(↑烏丸光廣)

(注意) ↑印の下の人名は、別途の師匠。此は、後の多師を仰ぐ風を言ふ場合の爲に、わざと掲げた。

四 啓蒙時代

隱者文學末期

江戸の政治は、最初から保守であつた。寧保守を表にして隠忍した、漸進主義であつたとも言へる。そこに世人は、其隱微を察すると共に、又全體として批判が、さうした點を中心として集注してゐる。唯、此時代初めから、元祿以前にかけての特徴は、前代以來の教養が、存外廣く武士・郷士階級に及んで居たことである。

其等の知識を無視しては教化の行はれる理由もないことを察して立てた幕府の勸學の方針が、更に此勢を煽つた。だから、武で仕官を得ずば、文を以てありつきを求めようとするやうになつた。さうして中には、二つ乍ら相兼ねた者も尠くはなかつた。さうして悉く志を得た訣ではなく、寧志を失うて流離する者が多かつた。此等の中の武に偏した者は、歌舞妓衆・町奴などにもなるが、文に長けた者は、口を糊する道が乏しかつた。其ばかりか、文道に在る者は、個

人の聲をも、社會全體に及ぶことが出来たのである。教養薄い此時代においては、さうした儒道或は文學を以つて世に立つ事の出来ない輩に、其々ありついた者と、對等の實力あるものが多かつた。其だけに不平が迸つて、批評となつた。儒を以てする者は、政道・經濟・軍法に、文を以てする者は、歌・連歌・俳諧・艶書の類から、軍談講釋の類まで試みた。さうして其間に苛辣な非難の言を挿んだ。さう言ふ聲を聞くに馴れた當局者は、無意味の謠言までも、妖言として聞きとつた。此を根絶するには、學を勧めを廢するか、一方の學に集注するか、或は又職なき有能者を野に留めないことであつた。爲政者は、異學を禁じることを方針とした。だが文學、殊に日本學及び短歌文學の人たちについては、警戒することを疎かにした。此が、在野の儒學勢力去つて後、長く野に批判力になつて残つた理由である。國學はこゝに起る。短歌連歌だけでは、まだ獨立した一家の學たり得なかつた。儒學の教養或は佛家の學を以て、雜然たる組織——一つの神學にも似たものを作るやうになつて行つたのが多い。さうして、其日本學を中心にするものは、神道者に近い色彩を以て行く。儒學・佛學其々中心とした者があつて、様態種々であつたが、結局世の中を眞に謳歌する者は尠かつた。之が對象となる理想境を見出

さない間は、江戸幕府の方向は、其でも安全であつた。かうした隱者形態は、前代の隱逸者には、見ることの出来ぬものであつた。

増穂殘口の如き、諸道に通じ、艶道まで兼ねた人もあり、下河邊長流・木ノ瀬三之・戸田茂睡のやうな、歌に向つて學に向つて、新な批判を試みる人々が出て來た。

長流の生れた大和松山(宇陀郡宇田)では、どう言ふ種姓だつたか知れぬが、後水戸侯の招請にも應じなかつたといふ傳へは、隱者の風格を思はしめるものがある。唯、其と目的の通じた萬葉集管見が残つて居り、萬葉訓詁書としては、時代よりも進んだものがあり、此が如何ばかり契沖の代匠記の刺戟になつたかは察しられる。集には自撰の長龍延寶和歌集があり、又契沖選の晩花集がある。歌は、此人々に至つて、やゝ文學を見出して來た觀がある。延寶集及び晩花集には、「爲兼に倣ふ歌」なることを詞書きにしたものがある。彼の歌が、契沖と共に、やつと二條流の主題を脱し初めた理由が知れる。おなじ「長」の字を持つた長嘯八十の年には、彼は既に廿五歳の壯盛りであつた。さうして、大阪に住んで町人たちを教へて、隱者としては、やゝ新しい生活法を採つて居たことが思はれる。凡、二十年長じた宗因とは、同時に同じ大阪三郷

の中に暮して居たのである。

木ノ瀬三之も亦、固い型の隠者で、里村昌琢に學んだと言ふが、和漢佛に通じた人らしい。佐佐木信綱さんの推輓によつて、世に弘く紹介せられたが、弟子としては、今井似閑等のあつたことから寧ろ、注意すべき人であらう。古今傳授を「末の世になりて、愚かなる人の卑しき心より、傳授といへること始れり」佐佐木博士の引用せられたものにも見えて居る。

かうした自由批評は、必更に以前からあつたに相違ない。隠者としては、武家に反感を持つと共に、公家の無力を知つて來た時代である。さうして自ら守る學を持ちはじめたのである。公家の傳統する傳授事を軽く値ぶみするやうになるのは、時勢の然らしめた所だ。

戸田茂睡は、駿河大納言の臣下の子で、流離の末ありつきを得たが、後又其を失うた。だから殆、生れ乍らにして漂遊學徒の格を備へてゐる。此人は、江戸の町の成長の過程をつくづくと見て暮した。而も當時江戸の近郊眞土山の下に住み、又本郷丸山に居て、いまだ完成せざる粗野な江戸の性格をも持つて居たであらう。恐らく開拓の届かぬ江戸文學の曠野に鉢を入れようとして、發表したのが梨本集であらう。此書は、歌道師範としての新しい門地を張らうとする

氣込みを見せてゐる。

實作の巧拙はともかく、問題は理論を以て、前行者の迂愚を指摘して、我に依るべきを示すにあつた。だから彼の歌論家としての爲事にも、隠者らしい野心を見逃しては、意味なくなるものがあるのである。作物は一句數句の間に捨て難いものは往々あるが、まだ長流だけの境地にも達して居ない。つまり古歌集についての勉強が、まだく足らなかつたことに、その理由があるやうである。

五 隱者及び學者

學問が文學を生むよりも、寧妨げになる場合の方が多し程である。だが啓蒙時期において、據るべきものは、やはり古典及びその研究である。そこに文藝復興があるのである。長流が爲兼集を読み、曾丹集・散木奇哥集を推讀したのも、理由のあることである。單に従來の人々の讀み又味うて來た作物集だけでは、おのれの鑑賞眼も亦、囚はれ勝ちなものである。だから其等をまづふり棄て、新しい物に就く必要があつた。草庵集や三玉集では、どうにも魂が引き出されなかつたのである。又古今・新古今・新勅撰の類を見ても、見方が固定してゐる以上、一舉に新しく目を開く事は出來ない。長流・契沖等は、どう言ふ契機キツカからか、さうした新風を孕んだ多くの歌書を読んだ。

契沖は、悉曇學の方法を以て、古代中世の言語を研究し、又其に馴された心で、研究態度を會得した。歌及び歌物語の類の研究から、更に萬葉集に進んだのであらう。彼が尼ヶ崎の生家に、

まだ四歳の乳兒であつた時、萬葉集寛永活字本は出たのである。さうして、其生家下川氏の仕へた青山侯も亦、歌を愛護したことのある家であつた。

近來までもさうであるが、萬葉集と、創作物としての歌との關係には、不思議なものがある。歌人學者は、歌の本質に對して、大體に、溯上の限界を持つて考へて居たやうである。たとへば、我々が記紀を見ても、其様態の歌を敢へて作らうとしないやうなものが、萬葉集に對して持たれてゐたのである。萬葉集は歌集には相違ないが、古人等の考へる作物の歌とは、隔りのあるものであつた。學問の對象ではあるが、創作の規範にはならぬものと見られて居たことである。師範家の持ち來りの型の謂はれないことは知りはじめても、歌は、師範家の掌る範圍のものを、文學と見てゐたのである。即此間においてこそ、學問としての歌もあり、文學としての歌もあつたが、萬葉集はやつと學問になり得ても、其以上のものではなかつた。だから完全な短歌學の對象ではなかつた訣だ。此考へ方は、近代まで續いてゐる。最近の萬葉學者木村正辭先生の歌が、家持の時代にも及んで居ない。精力を萬葉註疏に集注した鹿持雅澄の山齋集は、やつと家持に達するか否かの程度の古風である。本居宣長の鈴屋集に古體と新體とを分けたの

も、かうして見ると却て見識が高かつたと言ふことも出来る。賀茂真淵が其前に在つて、ともかくも家持調でも、萬葉ぶりを唱導したのは、彼の文學を鑑別する才能を思はせるものがあるのである。ともかくも、歌が純文學風に作られなかつたと同じく、萬葉集の持つ文學性も、認められることがなかつた。だから勿論、萬葉ぶりを歌にとり入れる性質の「歌がら」とも思はなかつた。此ことが前後久しきに渡つてゐるのである。つまり、萬葉を去ること久しきに過ぎた爲である。まだしも、平安中期又は末期の歌人は、幾部分でもこれに模しようとしてゐる。契沖だけの人で、萬葉の影響を彼の文學に受けることの極めて少いのは、不思議乍らかうした理由があつたからである。長歌の如きも達意であるが、まだ文學性を持たず、其だけに萬葉よりも、古今ぶりの長歌であつたと言へる。

……大空の雲もたゞよひ、塵もさり、水なき琴のしたびに
も流るゝ音し、琴柱には咽ぶ音して、鶯は古巢にあるを、笛
の音に其も囀り

無常賦

平俗ではないが、音調が後世風ではさくである。萬葉集に親しんだ第一人の作かと思はれるばかりだ。尤、長歌は容易に其拍子情調を移すことの出来ないものと見えて、江戸期の古學者中、眞に萬葉に出入し乍ら、近代感を詠み得たものはない。唯一人、加納諸平の作物をとり出して、他の人々の長歌と比較して見ると、却て長歌の如何に擬し難く、又創作し易からざるものを持つて居たかが知れる。短歌には、文學としての想像は、相當に持つて居る。

富士の嶺は、山の君にて、高御座 空にかけたる雪のきぬがさ

なるほど、殊に二句が俗調だし、三句の据り、四五句の移り皆俗だ。雪の華蓋を見立て、其下に高御座を考へたのは、今一步之を救ふ詞があつたらと思はせる。即、萬葉調でよまれたものとしたら、此常識味と凡庸感は吹き飛ばされて、文學作品として、見直すことが出来た筈である。其でも、題材が題材だけに富士百首は、萬葉集の佛を更に透き寫しにしたやうな所のある

のが、却て、人を憮然として寂しませる。

共に立つ 宿の梢の朝鳥の 還る夕を、何處にか寝む

多少の趣向を思はせてゐる作だが、底にあるものは偽りではない。一句に病ひあり、二句が構圖し過ぎてゐるのである。三句以下は、西行にもなく、又後の良寛にもない柔軟性を出してゐる。感傷性を露はにしてゐるが、感傷そのものに留意の示されなかつたのが自覺して用ゐられ、次いで其が厭はれ出したのも、明治及び其以後の事である。昔の作物で、感傷を扱つてゐるのは寧ろ、優れた用意と見るべきであらう。彼が文學上の「若さ」を持つて居たことは、此作でも見られる訣である。

初瀬のや 里のうなるに宿とへば、霞める梅の立ち枝をぞさす

明治の新派短歌が興隆しても、尙此境地は棄てられなかつた。現實を擬古表現して、而も其寫

し出す所は中世的である。人は之を新古今式だと言ふかも知れぬが、其は外的な感じ方に過ぎない。唯、江戸期の歌の正調と謂つたものは、かう言ふ所にあつたのだと見るのが、本道だと考へる。「霞める…」と言語上の美化を行ひ「…立ち枝…」と選擇を加へたのは、言語だけの問題ではない。かう言ふ點を末梢的なものと見てしまへば、擬古文——殊に散文などの場合にも、價値を失ふものが多く出る筈だ。上田秋成の文章の如きは、結句かうした古語と、漢語との選擇配合の上に、凡その價値がかゝつて居るのである。

契沖は、過去の歌集物語等を見わたして、其文學味も、時代としては十分知ることの出來た人である。伊勢物語を好み、殊に蜻蛉日記を愛したのでも、彼の鑑賞眼の凡でないことが知れる。唯、短歌文學の再認識の時代の選手であつた爲に、其文學の持つ過去の特殊性に煩ひせられることの多かつたらう、と言ふことは察せられる。其歌が一通り文學をなし乍ら、更に一往、草庵集風な遲鈍な感覺を與へないで居ないのは、時代である。だが此當時として此だけの新味でも歌に表すことの出來たのは、彼が優れた才能を持つて居たからである。文才が必しも文を作るでもなく、才に適應した作物は、時代と、深い感激とが之を進めるのである。彼は、早く悪い

時代に生れ、文學感激を催すべき生活をも持つて居なかつたことを考へてかゝらねばならぬ。其作物中に見える覺めた美意識と、文學計畫は、之を古きに求めれば、やはり冷泉派の古様又は、京極爲兼等から攝取したものと見るべきであらう。唯歌が極めて自在であるべきものとの自覺の替りに、ある小ぢんまりした纏りを欲した時代の後であるから、かうした作風になつたのは、當然と言ふ外はない。彼の集は、「漫吟集」として傳つて居る。其外に長流同様、自選の、「契沖和歌延寶集」がある。

六 古文學の發見

長流・契沖は、茂睡のやうな單なる理論家ではなかつた。曾ての歌人連歌師がさうであつたやうに、學と作とを兼ねて、一つの「學」としてゐた。此點、同時に彼等に先だつ隱逸長嘯以下の人たちよりは、日本の文學史風な意味における文學者であつた。學と作と併行しない所に、文學がなかつたのである。でも此亦やがては純文學者と言ふべきものを生ずるやうになつた。都會生活のをりに馴れた人々は、漸くさうした傾向に趣いた。併し、其とても、誰一人として敢へて學問の、文學に不必要なることを揚言した者はなく、不必要は認めて居ても、外面修飾の爲に、古文辭の研究を銜ふやうになつて行つた。

唯、契沖も長流と同じく、學と作力とはあつたが、其學の爲の眞目的は持たなかつた。之を見出したものが、國學者であつた。古文辭以外に、古代生活を見ようとした。文藝復興の本體を掴まうとしたのである。

七 萬葉調の概念

私は古く、和歌における萬葉ぶりの起伏状態を述べたことがある。眞淵に到つて、理論上に完成した萬葉ぶりの歌は、作風としては、眞に純然たる萬葉を見ることは出来ないにしても、萬葉に向はうとする意向は、はつきりとして來て居る。其で、國學の發揚と共に、眞淵系統及び、其に準すべき流派において、萬葉主題の歌が行はれて來た。ところが、國學以前から傳統を持つて居る倭學、殊に公家堂上に傳へた系統は、此との交流が甚しかつた。其は、一人で二三の師匠に前後してついで居る者の多いの由つて居る。國學者のやうに見えてもさうでない倭學式の思想を持つたものがある所から、又國學者である筈の人々にも、おなじ氣流が流れて居る。さう言ふ人々は、多くは萬葉ぶり——折衷——非萬葉ぶり、此等の間に彷徨してゐるのである。だが、明らかに國學統でない公家侍・連歌師などの流れを引いたものは、やはり古い二條か、でなくば冷泉などの傳統を守つて、歌だけは交流上から生ずる新味を持ちながら、古今を宗と

したものに進んで來た。景樹が出ると、その位置と、居住地との關係、其に加へるに彼の渡世才能によつて、調においても、内容からも、安易なものに轉向させるやうになつた。其は景樹自身よりも、彼の門流の人々によつて遂げられた部分が多い。

だが、萬葉ぶりは、かうして、古今調にうち負された形を探ることになつた訣だ。此事が、明らかになつて出て來たのは、寧明治時代と見る方が本たうであらう。其を二十年代の末から起つた新派和歌の運動が、一擧にして、又元の形を——と言ふよりも以上に、古今風をおしこめてしまつた訣なのである。今日においては、所謂舊派の古今を宗とするものは、唯相當な人數の作者を持つて居ると言ふだけで、一つの文壇をなしても居ないし、文學自身ですらもなく、情熱を失うたものになつてしまつたのである。新派運動の嚮導力はやはり、近いところには、學校等においてせられた古典教習の結果であるが、其をとほして窺はれるものは、國學者の萬葉作風及び、稍完全に把握した古典の力であつた。つまり萬葉ぶりが勝つたことになる。之を溯つて延長すると、萬葉から百年後に古今が出て、此二つの流れが交錯し乍ら、次第に古今に壓されて行く。而も時々、萬葉ぶりが少しづつ復活する、と謂つた形を見せた。平安にお

ける曾根好忠・源俊賴の態度は、萬葉と通じるものが多かつた。さうして俊賴に對して居る勢力であつた藤原基俊すら、萬葉を標榜して居たのである。而も彼は萬葉から、何物をも得て居ない。萬葉の精神と言ふよりも、生活の把握が如何に困難かといふことは、江戸や明治だけの事ではない。昔からさうだつたのである。もつとおしつまつた末期平安歌人にも、萬葉訓讀のある成功から持ち來された、萬葉ぶりが見え出してゐるが、其が著しく姿を残したのは、東國まで輸出せられた、と見える源實朝の萬葉ぶりである。其同じ勢が、京極・冷泉の作物製作の一動機にもなつて残り、常に一知半解のまゝの文學刺戟となり續けて來て居るのである。だが謂はば、此長い期間において、萬葉ぶりは地下水のやうになつて流れてゐた。さうして、冷泉流の行はれる所に、多少實感を持つて、萬葉めいた歌風が鑑賞せられると謂ふ、あり様だつたのである。……』

この萬葉・古今兩歌風の交錯状態の考へ方は、今思へば、古今自體から、萬葉以來の繼承要素をとり去り獨立させて見て居る點において、可なり不自然なものがあると言ふことが出来る。だが以前、友人島木赤彦在世の砌、この考へを提出したことがある。多少、現在の萬葉論の基

礎となつてゐることは、明敏な史家は見るであらう。だから此點、もつとよく訂正しておきたいのである。たゞ民謡においては、その性質上多く記録せられないものであり、又時間的普遍性を欲する爲、殆永く同様の主題をくり返して居る。唯新鮮な刺戟の變化を欲する性的な敘述以外は、言語・句法の末に到るまで、驚くばかり古典的であつた。かうした推移不容易性から見れば、民謡は、古今以前からの要素を、鎌倉にも又室町時代にすらも、尙持ち續けて居たと見られぬではない。作者或は諷誦者の生活その他、環境ばかりによつては見られぬ所の、古典性の固持揚棄交錯の状態なのである。萬葉ぶりに近いものが、時代々々の民謡の變化の基礎にはあつたのである。ともかくも、論理形式として、萬葉古今の對立を假設して見るならば、こんな風に考へることが出来るのである。

さうして事實においては、萬葉と古今とが目安とせられて、歌風歌派が見積られて來たことも、亦事實である。この二つの歌集の外に尙、新古今集が現れて、一つの獨得な文學境地と主題とを顯し初め、こゝに短歌の本質の成立に近づいて來た。而も眞の文學態度らしいものが生じたのは、此集の成立前後にあるのだから、假設は假設のまゝの構圖として、此三つの集を中心に

して、近世の短歌を考へて行くのも意味はあるであらう。さうして眞實には其後に出た玉葉・風雅においての「短歌本質成立」、かう言ふ事實が、之に對立してゐることを決して見落さないやうにしたいものである。

八 眞淵と宗武と その一

國學を以て世に立つたつきとすることは、まだ極めて困難なことであつた。さう言ふ世の中が來る爲には、まづ、國學が學問となる必要があつた。而も第一には、經國濟民の理想を寓したものでなくてはならなかつた。又儒者が常に立てる言説のやうに、聖賢より流れ出でて、邪蕩なきものでなければならぬ。歌は儒學における詩よりも、一層國學に關係が深かつた。だが詩經が持つと考へ倣されたやうに、思邪シヨなきものばかりではなかつた。國學者が天下の學を築く爲には、此點が問題とならずには居なかつた。

天下の學となる爲には、江戸將軍をはじめ、諸侯の家學とならねばならない。率然と起つた國學が、かうした天下の學となることは、單純な努力では達せられるものではない。だが又幸に、さうした高位の人々に近づき易いものとして、歌が、國學に附隨してゐた。文學を好み、新し

い意味における歌學としての國學に、親しまうとして居た八代將軍の御曹司たる宗武が、在滿よりも眞淵に就くのは當然である。在滿以外にも、眞淵以前の指導者があつたであらうし、在滿辭退前にも眞淵が進出して居なかつたとは言へぬ廉々がある。宗武の歌を見ると、鎌倉將軍實朝同様、古態新様が相當に交つて居る。其萬葉ぶりの新しい歌が、宗武一個の力で率然生れて來たと思ふのは、あんまり文學史を見る者としては、悠長な考へ方と言ふ外はない。實は我我としては、宗武の歌及び歌の上の主義が、何處から來たかが興味になつて來る。其誘導者として、眞淵を考へることは、一應正しいやうである。だが尙考へねばならぬ餘地のあることは、宗武論において述べた。

而も此翁の、田安家に出入りするやうになつた頃は、まだ凡萬葉ぶりの歌人と言はれない時代で、村田春海の所謂『其頃はかの荷田の家のをしへのまゝにて、いにしへぶりなど言ふ事は、尙唱へ出でられずなむ』とある五十歳未滿の頃の事であつた。

かげろふのもゆる春日の櫻花　あるかなきかの風に　かをれり

秋の夜のほがらくと　天の原照る月影に、雁鳴きわたる
こほろぎの鳴くや　縣ノカサの我が宿に、月影清し。とふ人もがも
にほとりの　葛飾早稻の新釀シノム　酌みつゝ居れば、月傾きぬ
夕されば、海上ウミがたの沖つ風　雲居に吹きて、千鳥鳴くなり

眞淵ほどの人でも、純然たる萬葉ぶりの歌は、實に寥々たるものである。我々の時代の最喜ばしい發見で、同時に一つの動すことの出來ぬ鑑賞法を立てるに到つたことは、萬葉ぶりの歌の正しい値打ちを見たといふことである。凡萬葉ぶりである限り、まづ其後のいづれの時代の作物をめどにした擬古作品よりも、通常非常に優れてゐることは、事實である。かう言ふことは、今こそ常識のやうになつてゐるけれども、其でも尙多少不滿を持つ短歌作者、鑑賞家がある。ましてアラ、ギ派の作風が時代を作らなかつた以前は、個々の作品について相似た他の時代の風に擬した古典歌よりは、必優れてゐることを感じてゐた人でも、理論の上にも、感情の上にも、容易に受け容れなかつた考へ方である。だが、短歌が末梢の技工を思ふことの少かつた時

代、又其新興の氣の正しさと美しさを發揮した時代に最近いだけに、——此がすべての國々の古代作物の宜しさの因である——何と謂つても、萬葉の歌は、第一義式な素朴と均整とを保つてゐる。其をとり入れたのが、國學者の常に抱いてゐる文藝復古への憧憬である。此精神は、後代の文藝の本質のよさを發揚し初めた時期を、鋭敏に感得したのもあつた。

萬葉の歌は、かうして他の時期の歌よりも、一群として不動の信頼を持たせるやうになつた。此は今の萬葉調流行の時代の去る事があつても、地を掃つたやうには過ぎ行かぬ鑑賞法である。さうしたよさを、冷泉・二條二流の歌風の混淆時代、又稍新古今ぶりの喜ばれ出した時代、古今風があらゆる形において遍滿して居た時代に發見して、ともかくも理論として發表するに到つた眞淵は、國文學鑑賞法に、大きな新しい事實を打ち立てた人と言はねばならぬ。

此事實の前には、其作物が、相當各時代の歌風を雜糅してゐると謂つた事も、大した疵とはならぬ。つまりさう言ふ陣痛を経て若干の正しいものを、確實に掴んだと言ふ事になるからである。其ほど、眞淵においてすら、萬葉ぶりはあつても、純萬葉の氣魄の撲つと謂つた作品は少いのである。だが其以外に多くの萬葉ぶりの歌がある。時代々々の歌風の上に、萬葉語又は萬

葉の拍子を一部分に措くことによつて、其歌の情調を古典的にひきあげると言つた萬葉ぶり、此が賀茂翁の作物の本體と言へるかも知れぬ。だが其は、何處までも、數の上の問題である。本體といふことが、其人の最後に到達した最よい姿と言ふ意味なら、極めて數は少くても、作風を決定したものを擧げるのが正しいだらう。だから、眞淵の歌は、此二つの判斷の上に置かれてゐる。

だが、追隨者の歌で見ると、何と言つても數の多い作物の傾向を、其先覺の本格の姿と見るであらう。眞淵の弟子では、揖取魚彦が——問題はあつても——萬葉の單純性を守らうとした外は、眞淵以上に各時代を混淆した歌風になつてしまつてゐる。此が國學系統の歌人の歌を、凡萬葉調にのみ趣かせなかつた理由なのだ。

最訣り易い例を引くと、加納諸平である。彼ほど賀茂翁を尊敬する色々の因子を備へて居た人が、ちよつと見には、如何にも賀茂翁と違つた歌を作つてゐる。併しよく／＼見ると、彼ほど亦、眞淵に似た作家もない。長歌においては、晦まされない知識を以て、吾々は見ると、諸平の作物は、眞淵の長歌から出發してゐればこそ、あれだけの抒情味のあるものが出來たのである。

「岡邊の家にて詠める（眞淵）」などがなかつたら、諸平は長歌に自在な境地のあることを知らずにするだらう。長歌を比べた後に、短歌を見ると、如何に眞淵が諸平の歌の素地になつてゐるかが知れよう。眞淵を純萬葉、諸平を單なる後世風の歌人ときめてかゝつて讀んでは、問題にならない。まづ賀茂翁家集その他と、柿園詠草とを心靜かに讀み比べて見れば、私の欺かない事が決るであらう。全作物を通じて得るものを重んじたのが、諸平の眞淵に對する態度である。却て極僅かな作物の中に、窮極の姿のある事を見逃してゐたのである。諸平その他の歌人も、此からあげる位の萬葉ぶりならば、實作を残してゐるのである。

を筑波も 遠つ葦穂も 霞むなり。 嶺越し 山越し 春や來つらむ
すがのねの 長見の濱の春の日に、群れ立つ鶴の ゆたに見えけり
み吉野を 我が見に來れば、落ちたぎつ瀧の都に、花散りみだる
ふる里の野へ見に來れば、昔 わが 妹とすみれの花 咲きにけり
雲雀あがる春の朝明に見わたせば、をちの國原 霞たなびく

あしびきの 岩ね菅原。 いくつ夏繁りゆくらむ 岩ね菅原
天の原 八重たな雲を吹きわたる息吹もがもな。 月のかげ見む
縣居の茅生の露原 踏み分けて、月見に來つる都人かも
こほろぎの待ち喜べる 長月の清き月夜は、更けずもあらなむ
はしだての 倉梯山に雲霧らひ、高市國原 雪ふりにけり
尊き哉すべらみことは、神ながら神をまつらす。 今日のにひなべ
信濃なるすがの荒野を 飛ぶ鷲の翼もたわに 吹く嵐かな
朝日かけにほへる山に、紫の雲ちわたる。 春近みかも
み民われ 生けるかひありて、さすたけの 君がみことを 今日聞ける
かも
飛驒たくみ讚めて造れる眞木柱 たてし心は、動かざらまし
不二の嶺の麓を出でゝ行く雲は、足柄山の峰にかゝれり

實は、眞の萬葉調といふ程のものではない。だが其中に這入つてゐる若干の萬葉語彙、萬葉情調ある句が、他の時代、他の歌風であるよりも、どれだけ此等の歌を、たけ高く見せてゐることか、明らかかなことであらう。

一等初めに擧げた「かげろふのもゆる春日」の歌の如きは、傑作の一つだが、萬葉に喜びを感じることの薄い人は、萬葉ぶりとは見ないであらう。萬葉ぶりを他のふりから鋭敏に感じ分け、る人は、之を萬葉の潜んで出たものとするであらう。かうした點になると、個人の直観と知識との、一つ物の鑑賞の上にも、色々な効果を持ち來す事が思はれる。ともかく、眞淵が萬葉集を愛して居なかつたら、かうした姿にかうした境地が託せられて來なかつたことだけは、否むことが出來まい。此が既にさうであつて見れば、第二例にあげた多くの歌は、同感せぬ人から見れば、全く萬葉の形骸を學んで學び得なかつたものと言ふであらう。だが、其人が萬葉でないと感ずることは、同時に古今・新古今・玉葉風雅でもないと言ふことの出來る根據にもなるのである。ともかく、混淆した歌風を、若干萬葉で統率する傾向にあるものと見るが正しからう。

萬葉に親しみながら、又萬葉提唱以後の作もあるだらうのに、賀茂翁家集の「戀歌」の部は、どうしてかうだらうと思ふほど、後代調である。どうかすれば、二條末流の作かと思はれるほどである。戀歌はかう言ふ型を出ぬものと、彼は考へたのかも知れぬ。併しさうした同じ歌口のもので、他の部類には、眞淵の詩人としての天分を窺はせるものがある。

筑波山雫のつらゝ 今日とけて、枯れ生の薄 春風ぞ吹く

(筑波：しづく萬葉語)

とふ人の笛も聞えて、垣の内に梅散る風のおもしろきかな

(擬王朝物語風)

霞たつ春野の雲雀 何しかも、思ひあがりて ねをばなくらむ

ふる里は、春の暮れこそあはれなれ。妹に似るてふ山吹の花

D 高き屋は涼しかりけり。あらがねの土てふものし 夏にやあるらむ

D 今朝はしも 竹の林ぞそよぐなる。世は秋風の立ちやしぬらむ

たなばたの逢ふ夜となれば、世の中の人の心もなまめきにけり

(第五句の實感力は、非常である)

とほつあふみ 濱名の橋の秋風に、月澄む浦を 昔見しかな

(桂園一枝にある境地。姿はなよ／＼してゐるが、感覺をとる)

さゝなみの 比良の大わだ 秋たけて、よどめる淀に、月ぞすみける
かみな月 今日も時雨のはれにけり。曇りにけりと 言ひて暮しつ

(景樹に、殆同想のものがある)

D 冬枯れに、里の藁屋のあらはれて、むら鳥すだく梢さびしも

我がいほの庭には、あともなかりけり。落ち葉が上に、ふれる白雪
ふる雪の白斑の鷹を、手に据ゑて、武藏野の原に出でにけるかな

(調子に濕氣はあるが、單純化を思つてゐる處が見える。桂園調の前型)

D 色かはる萩の下葉をながめつゝ ひとりある身となりにけるかも
茂りあふ松かげに 君をおきしより、風の音こそかなしかりけれ

雄鹿なく岡邊の萩にうらぶれて いにけむ君を いつとか待たむ

眞淵の歌を通覽すると、こゝに二三抜き交ぜた類の桂園調と謂つたものが、かなりある事を發見するだらう。あれほど景樹が、眼の敵のやうにした賀茂翁の歌が、全く桂園歌に影響を與へなかつたとも言ひきれなくなるのである。人は概念の上には争ふ事があつて、現實には却て歩みよつて居る事が、屢ある事を思はせられる。

過去に、鎌倉右大臣實朝を發見した眞淵は、同時代に田安侯宗武を知つた。さうして、其實朝において數少いが優れた萬葉ぶりを見る如く、彼自身亦作物中に極めて少い萬葉歌を残した。併し何れにしても、其が到達點だつたと思へば、我々は安んずることが出来る。さうした中には、宗武が、わり合ひに、多くの萬葉ぶりを、全歌集の中に留めてゐる。だが、かう言ふ意味においても、數を以て文藝家の才能・天賦を定めることが出来るかどうか。

眞淵について言ひたい事は、山程ある。だが此と景樹の分は後追ひとして挿込むのである。唯心ゆかしのつなぎとして之だけを書いたのはまだしもだ。此も學問の祖先に對する報謝である。

九 眞淵と宗武と その二

ともかくにも、所謂堂上風なる二條傳統の歌柄は、陽に守られ乍ら、陰にはありふれた見識のないものとして、學才を抱くものの屑しとする歌風ではなくなつて居た。尠くともさうした意識が、人々の心に動きはじめて居た。従つて其聖書なる古今集が、まづ疑はれねばならぬ時に達した。だが長い歴史は、やはり流傳せられるには、其だけの價値の勿論あるものと考へて、古今集をふり棄てる事は出来なかつたのである。而も此古今集に替るべきものが、何だかと言ふ目安は、既に立ちかゝつては居た。其が萬葉集におちつくものとして、安易に考へるのは、歴史の迂餘曲折を、考へに容れて居ない近代の見解である。だから先、萬葉が適度に文學性を認められるまでに模索せられたものを考へないでは居れぬ。即、新古今集である。此集ならば、成立傳來いづれから見ても、何れの流派からも排斥せられる筈のものではなかつた。だが、此集には、まだ傳統ある歌學が出来て居なかつた。其だけに、學の對象としては、江戸期に到つ

て、初登場したやうな訣である。而も、新古今集の中に、古今集を見出すことに、一つの意義が見られるのである。

荷田春滿の家學を傳へた在滿は、既に春滿の築いておいた基礎の上に立つてゐた。だから、春滿の理想を追ふことに急しかつた。其で、先人のとつた方法は深められずに、寧ろどうして正しく之を活すかといふ點にかゝつてゐた。彼は新しい有職家のやうな形を持つて居た。一つは、江戸の上流に重用せられた高家の姿をとつて、規範としての國學を與へようとしてゐたのかも知れない。彼の「國歌八論」で、價値を高く認めたのは、新古今集であつた。さうして、新古今集の中の代表として、良經を採つて、定家を棄てた。謂はゞ、古今集の「よみ人知らず」の風格を延長したやうなのが、後京極攝政であつた。在滿の方針は、正しく領かれるものを持つて居る。國歌八論餘言を書いたのは、田安宗武の名である。彼には、「天降言」の如き創作集もあるのだから、此論説も彼の執筆でないとは言はれぬ。だが同時に、歌文兩つながら、在滿以外にも、指導者がなかつたとは言へない。

在滿の田安家に出入を辭し、賀茂眞淵が新に殿人となつたのは、二人の間に極めて圓滿な受け渡しがあつたやうに考へられてゐる。だが、其にしてからが、國歌八論などの意見の行き違ひがあつた事に基くやうに説いてゐる説から見れば、數年遅れては居ても、露はに宗武説に贊同を表してゐる眞淵の爲方は、何か意味がありさうである。其に在滿の辭任は、大嘗會辨蒙に關しての謹慎の意義においてしたものであるとするのが、正しいのから見れば、——たとひ京都方面の故障によると言はれるもの——國學者として幕府から忌まれたものの早期の一人と言ふことが出来る。此人には、春滿以來の理想があつて、文學に泥むを屑しとしなかつたのではないか。こんな點でも、平田篤胤等の性格の一部が既に露れて居ると謂へる。宗武が彼を聘したのも、田安侯自身に水戸の光圀の影響があり、又其以外にも幕府親睦の大諸侯に幕府を輕視して、直に天日に接しようとする理想の者があつたのを、註釋として見ても解るやうに、古典古文學愛好の心には、據り所があつたのである。在滿に替つて眞淵が侍ることになつたのも、今言つたことの外に、或は信賴の眞淵に傾いた爲と見ることが出来る。單に國歌八論について、意見が合はなかつたから、と言ふ考へ方は避けるべきであらう。

『歌のものたる、六藝の類にあらざれば、もとより天下の政務に益なく、また日用常行にも資くる所なし。』

(評) 歌の本分の徳を知らず。後世の歌になづめり。

と言つた八論中の翫歌論の冒頭の句から見ても、在滿の態度が訣る。此部分だけ見れば、頑固な藝術無用論のやうに聞えるが、八論全體が此語に適當な裏書きを與へてゐる。其は、一面文藝功利主義に對しての解放で、歌に對してさうした實利を望む習慣を排したのである。又一方、到底歌は、一文學に過ぎない。經世家として見れば、片々たる作物によつて、何が望まれようと思ひ棄てた語でもある。「六藝の類にあらざれば」と言ふのは、在滿として矛盾のやうに聞えるが、歌道の人の無學なのに對して、自ら學倭漢に立つことを揚言してゐるのだ。だから、一つ事を両面から言つてゐることになるのだ。「評言」を見て知れるやうに、宣長のやうな圓滿な常識家でも、結局此點は却て、在滿までに到つては居ない。

『然るを中古以後の官家の人は、天下の政務、武家に移りて、わが閑暇なるまゝに、ひたす

らに歌のみを好みて、終にわが敷島の道と稱す。これ歌の本來を知らざるのみならず、道といふことをも知らざるからの妄言なり。論破するに足らず。

叛歌論

(評) 公よりも許し給ひて、此道を専らと任じ給ふ家の人なれば、我が敷島の道といはむことは、時代に取りては難なし。

文藝或は學問の上から、獨占式の傲りを憤つたのは、在滿の志が次の時代にあつたことが知れるし、宣長は稍後れてゐ乍ら、——勿論當代において最成熟した常識人としての言ひ方だが、其立ち場からは、何の新しいものをも得る望みはない。

『然るに、今の官家の人、……會々、力ある歌を見ては、輒曰はく、これ地下風なり。歌にあらず。これ誹諧なり。歌にあらずと』

官家論

(評) 眞に笑ふべし。

國歌八論全體から推すと、傳統と權威とを以て、文藝たることの刻印としようとした從來の歌に、學問の保證を以て、新しい價値をうち建てようとしてゐるのである。さうして、この考へ方は、この論議以前から實行に移されて居たのが、こゝに明らかに理論を立てたことになるのである。もつと適切に言へば、此以前から既に、一面から人々によつて、くり返されてゐた官家論が、歴史背景と綜合式な考へに統一せられて出て來た訣で、此論は、實行としての力を持ちはじめた其推進力になつたものだ、と言へようと思ふ。

在滿の八論に對しては餘言、眞淵の「國歌臆說」に加へて、剩言を書いたのは、宗武二十八歳から三十歳に到る間である。

宗武の歌集「天降言」は、その成立からして、すべての趣きが、實朝の「金槐集」に似て居る。殊に萬葉調のものと、其以外のものとが混つて居る點の注意は、誰しも向けることであらう。集中第八首目にある「九月二十三日、田安に家作り出で、今日なむ移り住みて——わが宿のかきほの松よ。今日よりは、幾萬代を もろともに經む」の歌は、詞書きから、享保十五年（十一月十

日)或は十六年の事と察せられる。さすれば十六歳か、せいゝ十七歳の秋である。其後廿數首は、享保以降寛延——三十五六歳までの間の物である。

見るたびに 袖をぞ濡す。いにしへのおもかけもなき 庭のくさむら
あはれなり。霧間に見ゆる山陰の 小田にと落つる 雁の一つら

姿は必しもさうでないが、情調は新古今を得て居る。さうしてこの部類には、萬葉式の表出を見ない。ところが次の四十首は、寛延寶曆の作物に、古い享保の頃のも交へたものと見える。「君が爲すなとりせむと漕ぎ行けば」「去年の冬のかしこかりしを思へれば」「洲崎べに漕ぎ出でて見れば……はるけく見ゆも」「萩の花散れり。今日のあらしに」「みことをうけて、弟も吾も……」「……螢はもけだしわが如……」「天の下いや榮ゆらし……」など言ふ萬葉調——今日の馴れた耳からはさ程でもないが、當時は此程度でも、異常な響を感じたであらうと思はれる。

洲崎べに漕ぎ出でて見れば、安房の山の 雲居なしつゝ はるけく見ゆも
富士の山 見むとし欲りて、山のべに作りし庵に 入り日さす見ゆ

寶曆から、明和八年(宗武歿)に亙る廿年間の作物は、其次にある百廿餘首が大體其らしい。

去年は さも思はざりしか。青みまず岩間の雪の、清く見ゆかも
春雨は音静けしも。妹が家にい行きかたらひ、この日暮らさむ
櫻花ちり敷く野へのつぼ菫 色うらさえて、摘みなむも惜し
あしびきの 岩間をしぬぎ湧く水の、落ちたぎち行く風のすゞしさ
琴の緒をさわたる風の ひゞかすに、秋さり來ぬと 今はしるしも
ひむがしに向へる家は、朝明けに 明け行く空を見つゝ 樂しき
あをぐもの 白肩の津は見されども、今宵の月に 思ほゆるかも
たまどりの八尋のたり尾 開き立て、めぐる姿は、見れどあかすけり

菰^{コモ}かけに浮む澤^{サハ}鷄^{カケ} その菰に、とさかの句はえて いつしき

この外に歌がらは寧、此等に優れて、單純化の出來たものが相應にある。其等を以て、宗武の萬葉調と見る風はある。が、こゝにはなるべく、内容から、又形式から萬葉風なものを探つて見た。

この人の作風を見ると、如何にも古語と言ふものの新しい文學に入つて、一つの妥當性を生じて來る道筋が訣る。

むら松のそがひを登る 月讀のなかばにわたる雲さへ、うれし

眞帆ひきてよせ來る船に 月照れり。楽しくぞあらむ。その船びとは

霞わけて 雁歸る見ゆ。行くさきのはるけきもへば、あはれむ。われは

我系し時は、枯るべく見えし わが庭のしだり柳の 愛^{アイ}たくなりぬ

この類の發想が頗多い。此は必しも萬葉の語脈を其まゝとり入れたものではない。だが、宗武自身は、さう考へたかも知れぬ。又天降言を全體に承認する人々の間にも、さうした萬葉ぶりに對する錯覺は、あるやうだ。

古語と近代語感との間の空際に、ある自由な、從來なかつた表現が齎す闊達なものが、人を快がらせるのである。之を全體として萬葉ぶりと稱するのは、一考を要する。だが、すべての文藝復興は、さうした感覺の發掘にある。宗武その人が發見せられたのは、此點からであつた。かうした語の一つ又は數個によつて、一首の調子の中心が生じ、又は統一せられて來る時に、在來の陳套無感興の痺れたやうな語句の上に、明朗と高邁なものを受ける。其主調になるものが、——孤立してゐても——萬葉語である時は、まづ萬葉ぶりととして許すことが出来る。だが、どこまでも、ある個人又はある時代の、ある世間が擱んだ萬葉調なのである。

宗武について、我々は多くの問題を感じて居る。だがどうしても、まづ考へてかゝらねばならぬのは、どうして萬葉ぶりを好んだか、又誰が指導したか、と言ふことにある。さうしてもつと大きな問題は、偶然に似た事實が、古人實朝にある點だ。時代も隔り、位置も若干の高下は

あるが、等しく將軍・將軍の子としての作物であると謂ふ點である。此事から、萬葉に對する、後代人の時代を超えての、共通した心持がとり出されないものであらうか。

實朝には、萬葉に行く一つの導きとして、前代以來の釋教歌があつた。さう言ふ意味において、宗武には、實朝があつたと言へる。だが、果して實朝の作物を見て、萬葉ぶりに入つたかは問題である。眞淵の實朝推獎が、彼をも萬葉ぶりに誘うたと言へぬでもない。が、果して、眞淵侍仕以前に萬葉愛好心を持ち初めなかつたと言はれようか。國歌八論關係の書類は、時期においては、在滿・眞淵交替のきほどの頃のものだから、其によつて明言は出來ない。だが、昨今の眞淵から教はつた影響がすぐに出たとすれば、眞淵の感化がよほど這入つてゐることになる。天降言の作品々の製作年代が、詳しく訣らないから何とも言へぬが、若い頃の物にも部分的には萬葉模倣があるらしく思はれる。この方面の觀察には、尙狛、諸成の如き侍臣その他について考へて見ねばならぬ。

根本において、かうした位置に居る人が擇ぶ歌風と、其生活の質とが關係して來る。其に指導者。この三つの要素の叶ふ所に、萬葉風を探ると言ふ事實が出て來るのかも知れぬ。自らにし

て、世間と違つた古典的な生活氣分、おほどかな調子、其が近代のこましやくれた歌風にあはない。だが唯習慣として無反省に作つてゐる人々は、其でよい。堂上風の作風でも、優に古典的な氣分を感じることが出来る。だが現代から見ると堂上風とは違ふ。其當時にしては、堂上風は、寧ろ世間一般に行はれた作風であつた。其に安んじて居られぬ人は、別なものを考へるであらう。所謂新古今風だと言はれて居るものも、ある部分、堂上風を残してゐるが、其とは大分變つてゐる。古典的で人の多く趣かないもの、と言へば傳へ聞く萬葉の外はない。實朝が萬葉に就いたのも、理由はこゝにありさうだ。其上萬葉の研究機運の濃厚になつて、仙覺萬葉抄のやがて出ようとする時機であつた。其に實朝の選擇する歌風が、追隨者の妙いものにあつたとすれば、萬葉に行く外はなかつた。宗武との間に五百年の隔りはあるが、外的事情はほと變つて居ない。萬葉が顧みられはじめても、やはり新しい歌風を形づくる程でなく、學問と歌とは別々であつた。併し段々、萬葉から直接に文學語をとり入れる風は、次第に進んで來て居た。世間には、萬葉文學が興らうと言ふ兆を持ちはじめて來た。此時に識見高く、新様と古雅とを併せ好み、誇り深い貴公子の自由選擇するものは、萬葉と言ふことになるではあるまいか。

既に水戸學の影響を受け、國典に對しては、光圀の計畫した萬葉註釋類に目を曝してゐたとすれば、歌が萬葉ぶりに傾いて來る外的理由は知れるであらう。さうして更に、萬葉を詳しく知らうとして居た時、人選に當つたのが、眞淵だと考へるのが、最適切であらう。さうして其後益、萬葉ぶりを發揮して來たもの、と見るべきであらう。

眞淵が、田安家の扶持を受けたのは、延享三年、五十に當る年であり、宗武卅二であつた。天降言の編纂法は、殆捕捉し難いものである。が、堀川太郎百首題の歌百八十首以後の四十餘首は、寶曆明和に互つてのものと察せられる。其以前のは、二ヶ所にある左註の爲に、判斷出來なくなつてゐる。だが其中、延享元年のもの考へられるのが三首ある。

いそのかみ ぶりにし唐の笛竹を吹き立て遊ぶ今宵 たのしも
かくしあれど、 去年より欲りしわが心 今宵の月とともに、 はれけり

わが君のさかゆくことは、 玉松のきのえの根さし ひろこるが如

後の二首は稍常識的なもので、調子も自ら低く見えるが、尙部分としての古調が全體を幾分救うてゐる。第一首はやはり萬葉ぶりの正調である。殊に下旬がさうである。かう言ふ風に年代が知れれば、眞淵以前にも、段々此形を示す作物を認めることが出来るのだらうと思ふ。宗武において、特に注意を惹く歌風は、

霞わけて 雁かへる見ゆ。 行く先のはるけき思へば、 あはれむ。 われは
眞帆ひきてよせ來る舟に 月照れり。 樂しくぞあらむ。 その舟人は
青雲の 白肩の津は見されども、 今宵の月に 思ほゆるかも
栽えし時は、 枯るべく見えし わが庭のしだり柳の めでたくなりぬ

此等の歌が示して居る拘泥のないと言ふより、前で扱ふ手を背に廻して動した感じのある發想法が、萬葉ぶりと言へば萬葉ぶり、宗武調と言へば宗武調と言へるものを作つてゐる。さうして此が、小ざかしい姿から逃避しようとする人に、常に一つの道を示してゐるのである。今の

萬葉調の歌に、此等の歌に習熟した結果生み出されたもののあることを思ふと、今一度近代萬葉の調子論を、考へて見ねばならぬ。

十 蘆庵と景樹と

我朝漢土、萬里を隔て、人情一般なる證少々可記之

(毛詩衛風伯兮章) 自伯之東、首如飛蓬。豈無膏沐、誰適爲容

(萬葉十) 君なくば何身かざらむ。櫛笄なる玉の小櫛も とらむと思はじ

(采葛章) 彼采葛兮。一日不見、如三三月兮

(萬四) 唯一夜隔てしからに、あらたまの月かへぬると思ほゆるかも

(鄭蕣兮章) 蕣兮々々。風其吹女。叔兮、伯兮、倡予、和女

(萬七) 神無月しぐれにあへるもみぢ葉の 吹かば散りなむ。風のまに

(小雅南山有臺章) 南山有臺。北山有萊。樂只君子邦家基。樂只

君子萬壽無期

(萬四) 春草は後は枯れ易し。巖なす ときはにいませ。かしこき我が君

(北山章) 陟^ニ彼北山、言采^ニ其杞。借々士子朝夕從事。王事^{ナレ}靡^レ盥^モ憂^ニ我父母

(萬二十) 大君のみこと畏み、いそに觸り 海^{ウミ}之原^{ハラ}渡る。父母をおきて毛詩も、萬葉もひろき文なれば、よりくあはせ見るべし。數多あり。我あはせ損じたるあらばあはせ直すべし。是はたゞ今わづかに思ひ出づるをかきたるのみなり。……(布留の中道)

如何に楽しい引用であるか。滋味の盡きない豊かな心を以てした比較である。殊に『穉分々々風其吹女』を『神無月』の歌に宛てたり、南山有臺を『いはほなすときはにいませ』にひき比べたりした所、學問の眼と、詩の心とが相叶うてゐる自在さが流れてゐる。さうして、漢學を

以て日本を説かうとしてゐるやうな、寧如何にも、海表の學問の方に達してゐたことの思はれる小澤蘆庵の詞である。

彼こそは、尠くとも百年遅れて出た隱者だと言ふことが出来る。江戸政治が葬り去つた生活が其自身亡びようとする兆の見え出した時になつて、忽然として出て來た形が、此人に見られる。儒學者は、江戸では早期から官學に登庸せられてゐた。其が段々人頭超過し異學に進む者が出來、さうした人たちが、市井に落伍して、隱者生活に似た姿をとるやうになつたのは、他の文學隱者よりは、遙かに遅れてゐる。

蘆庵が家を捨てた動機も、幾分遠く隱者の權輿鴨長明と似通うてゐるのも、偶然の縁を感じさせる。

其蘆庵が、蒲生君平の等持院の尊氏の墓を辱しめた話を聞いて、自らも懺悔をした。先年東山靈山で、長嘯の墓に對して、其武士らしくなかつた振舞を難じ、且、恣に歌詠んで歌品を下落せしめた事を舉げて、杖を以て打つたと言つた傳へが、果して正しいかどうか、保證の限りではない。だが、長嘯に何らかの關心が、此傳へにすら見えて居るのは、おもしろい。

長嘯を憎んだといふ説明は、馬琴等の誤傳か、曲解かも知れぬ。單に歌風の違ひの上からではありさうでもあり、ありさうでなくも考へられる。何れにしても、隱士風の歌よみとして、長嘯・蘆庵の間に、かうした交渉の傳へられてゐるのは、意味のあることである。

『五つには、たゞごとうた。』

いつはりのなき世なりせば、いかばかり 人のことは 嬉しからまし

これは、事のとよのほりたゞしきを言ふなり。此歌のこゝろ更にかなはず。とめ歌とや言ふべからむ。「山櫻 あくまで色を見つるかな。花散るべくは風吹かぬよに」

古今集序の歌の六義の第五の解説文である。いつはりの歌以下は、後世の書き入れであるが、蘆庵は、此項全體から、暗示を受けてゐると見てよい。

「布留の中道」に「問云、貫之いふ所のたゞ言うたは、こゝろのとほりをかざりなく、ありのままにつゞけたるものと見ゆ。此體よくば、かの「富士の山 おなじ姿に見ゆるかな。こなたお

もても、あなたおもても」「女郎花 色々にこそ 露もおけ。花には黄玉。葉には青玉」此もよろしとせむや」『答云、古人のたゞ言歌と言ふは、心をもとめずして思へる所を詞を飾らずして詠ずるを言ふなり。是は不道理を求めて續けたれば。詞にも優りて、其心あしきなり』。

段々承つてたゞ言のよい事は訣つたが、おもしろいたゞ言も多いが、『あまりにたゞありにておもしろかぬも亦少からず』。一點おもしろさうな心を所謂たゞ言でよんだらどうでせうとの問ひに對して、『答云、……わが思へることを言ひ出づるは、内心より出づ。さるをおもしろかるべき一ふしを言はむと言ふは、人のいまだ詠ぜざる心を求めて詠ぜよと言ふ教へにたがへることなし。……今思へる所をたゞ言につゞけならひ、誰聞きても、聞ゆるやうに修練つもりて、後は、如何なる事も、詞心にまかせて、自在なるべし』。

此本上中共、卷末に、古今序が、歌のよみ方の書き初め。代々の歌人・宗匠其に基いて、多くの歌書を書いた、と言ふ風にあつて、上には更に、私の本も其一つだ、此を見るよりも、古今序を明らかめ知つた方がよい、と言ふ風に附けたりがある。古今序の印象が、強く沁みてゐたのだ。此印象を分解して、蘆庵は蘆庵風に解してゐたのが見える。設問の「たゞ言歌は、心のと

ほりを飾りなく、ありのままにつゞけたるものと見ゆ」とあるのは、即歌の六義の「たゞこと歌……」の註の「事のとよのほりたゞしきを言ふなり」に當るのである。飾りなくがたゞしき云々に、こゝろのとほりをが事のとよのほり云々に大體叶うてゐる。詩の六義から言へば、「雅」に當る所がたゞこと歌になつてゐるらしいのだが、蘆庵も、漠然とかうした無成心な境涯において自ら成り出せるものがあり、其が「雅」であり、「たゞしいもの」だと言ふ位の感銘を持つて居たのだらう。ともかく古今の用語に極度の權威を感じてゐるのである。こんな風にして、蘆庵自身すら既に誤解せられるには困つただらうが、主張しとほしたのが「たゞことうた」であつた。此が心になつて、香川景樹の「しらべ」の用語例と理論とが出て來たのである。古今集の値うちを今更論じる事もないが、あの集のよさと言ふのは、萬葉集と古今集との過渡期の四季雜歌・四季相聞風なものにあるので、江戸時代のどの作者評者の心に這入つても、認めてゐる所は、此部分に濃かつたものなのである。だから、其を籠めて古今集全體をよしと考へるやうになる。すると、忽古今の「今」即現代作家―古今編纂時代から遠くない時期―のものが、古今の中心になつてゐる所から、其もよくなつて感じられて來る訣である。何と謂つて

も、古今調盛行の時代は長かつた。

新古今を唱道し出したのも、やつと百年になるかならずであり、萬葉集は更に新しく、五十年になるかならない位であつた。また古今集の歴史が重く意味深く、歌人の心を疑はせなかつた。かうして、歌道の經典のやうに考へられてゐた以上、其中の一首々は、優劣に繫らず、古今集の歴史の陰を曳いてゐた。一首とり出して味ふにも、一人をひき放して考へるにも、皆古今集中の物として背景を負うてゐた。だから今日になつて見ると、どうして此がと思はれる歌でも、優れたものとしての調和の中に這入つたものとして、一つとり出せば、やはり相當な値打ちを伴うて出て來る。つまり鑑賞法が特殊な條件を持つてゐた訣である。かう言ふ時代には、如何な優れた作の經驗を持つた批評家でも、さうした用意せられた鑑賞法にまづ没してしまふ。だから忠岑・貫之は勿論友則以下の歌人の作でも、自らよく味うて來るのである。かうある上は、古今集は愈、説明と、やゝ不完全な理論に護られた優れた文學書となつて來ずには居ない。

蘆庵の如きも、やはり古今の中から、自分の力でよいと感じたものを、又再おのが作物の上に

とり入れて來ると言ふ風になつて來る。蘆庵が冷泉家の門流だからと言ふばかりではない。出來るだけ虚心になることを努めても、彼の心に生滅するものは、彼の和漢書の造詣である。彼を凡俗にも邪道にも引き込まなかつたのは、此古典文學の力だと思ふ。だから蘆庵の作物に
出て來るものは、彼以前の古今を祖述する者の歌風にはないものであつた。彼以前の古今集風の歌が既に知識風なものになつて居た。彼は拘泥を救ふものとして、多作の方針をとつて居た。蘆庵の後に起る桂園風の歌は、實は蘆庵自身によつて、凡調べ出されて居たものであつた。

○照る月のかけにて見れば、山櫻 枝うごくなり。今か散るらむ
D 鶯の木づたふ枝は、見えねども、聲ぞ聞ゆる。夜は明けぬらし
野の宮の櫓の下道 今日來れば、古葉とともに 散る櫻かな
ちよこ草 はよこ草生ふる野べに來て、昔戀しく思ひけるかな
しらかしの瑞枝うごかす朝風に、きのふの春の夢はさめにき
ほとよぎすしばく鳴きし明け方の 山かき曇り、小雨降り來ぬ

とりはてぬ澤田の早苗 はるくくと末こそ見ゆれ。水の白波
D さみだれの雲吹きすさぶ朝風に、桑の實おつる 小野原の里
D 朝づく日さしもさだめぬ 大比叡の雲母の阪に、時雨ふる 見ゆ
刈りあげし畠の大麥 こきたれて降るさみだれに 干しやわぶらむ
D なびくだにすやしきものを 夏川のたま藻を見れば、花咲きにけり
うたゝ寝に うちながむれば、芦垣のしだり柳に 月はかゝりぬ
○青海の 太秦寺に來て見れば、身もなげつべき花のかけかな
蝴蝶だにいまだねむれる 朝かげの花を 起き出でよ、ひとりこそ見れ
、わぎも子が額髪ゆふ 元結の 濃紫なる 藤なみの花
D 昏れにけり。早苗とるしづが小笠原 夕日のかげも さゝすなるまで
家にして 今日に謡へる聲すなり。門田の早苗裁ゑみてにけむ
いかに寝む。麻で小衾うちかづく煽ちの風も 寒きこの夜を
D 墨染のゆふべの山をながむれば、松の立てるも さびしかりけり

此等の歌の中の多くは、此でも景樹のだらうかと思ふ人があらうと思ふ。其だけよいものに行き逢つて居り、又正しく其を捉へてもゐる。

桂園一枝及び拾遺の中で「事につき時にふれたる」の部ばかりから、まづ引いて見たのである。此部が明らかに、彼の主張を見せた特殊な部類であり、又其作物の中で、最尤なものが多いと言ふことが出来る。四季・戀・雜などの外に、此部を立てたことは、とにかく彼が歌に潛めた思ひのことの深さを示してゐる。一つ／＼を見れば、他の部類に入れて、ちつとも差障りのありさうに思へぬものが多い。だが、態度として見る時、彼の論からはどうしても、かうした分類に入らぬ部類を欲するのは、當然でもあり、之を考へたのは、さすがと謂へる。雜歌なる部類が既にある固定したものになつて、自由なものを容れることが、出来なくなつて居たのである。彼の「しらべ」の主張を貫かうとすれば、どうしても、こゝに出るのである。題によるのは、時々便宜を頼むので、自らなるしらべはゆくりなく出る即興の歌の上こそ、極めて自然に出て来る筈である。恐らく「事につき時にふれたる」と言ふ部は、其一つ／＼の歌の創作

動機から立てられたものであらう。だから、後で題を附ければ、何とか他の部類に納まるものばかりであるが、かうした事を行うた點に、景樹の文學者としての純粹性と、理論性があるのである。

其だけに、歌も、彼らしい型から出たものが多いし、もつとよい事は、梅月堂の遺産らしい二條風とも謂はゞ言はれる刺戟のない、弛緩した散漫な歌は尠いのである。だが外の部になると、さうは行かない。あまりにしらべに執した結果、形式要素をすべてしらべに置いて見る弊が多くなり過ぎてゐた。しらべ以外に、之に對立する程の價値を占めるすがたに關心を逸してゐるやうな傾きが著しく見える。すがたと言ふのは、内容の聯想が様式の上に加つて、而も形式要素のやうに混和した情調である。事實、語句の意義の連環によつて、感情が動されることなく、單に音の連続や、音の價や、音脚・休止などばかりで、我々の言語情調と言ふものは生じない。音感覺は先入要素ではあるが、我々の心理現象は、さう微細な區畫を、劃然と受納することは出来ないことを思はねばならぬ。音調ばかりと、意義ばかりとが、完全に判れて我々に享受せられる前に、この二つの相交つたものが、まづ感得せられるのが、常である。

「しらべ」を出すことに専念して、すがたを作ること忘れて居た爲に、景樹の歌は、無内容なものが多かつた。又無内容に近い類型を、出来るだけ刺戟を避けた閑かでもあるが、平板なしらべに載せて出すことが極めて多く、又強ひても其方面に努めて居たのである。彼においては、喜怒も哀樂も、皆ひとしく柔軟で閑雅で、さうした調子は常に啓蒙式なものであつた。

海原の水の 高くも見ゆるかな。幾重つもりし水にか あるらむ
世の中の花のあそびに、くたびれて、ひと寝入りせる 君が手枕

涅槃會

たまぼこの道ゆく人の うちかづく袖に一むら 降る霞かな
ふる里のしのゝ荒垣 野分して、葎のとぢめ ほころびにけり
春の夜を おぼる月夜といふことは、霞の立てる名にこそありけれ
かけろふの もゆる夏野の澤水に 夜たつ影は、螢なりけり
うつせみの 人目人言しげき間を しばしと言ひて 中絶えにけり

今日ぞ知る。ふして仰げば、位山いよく 高き君が恵みを

従五位宣下蒙りし時よめる

かう言ふ例は、いづれの部を引いても、直に引用の出来るほどである。其ほど桂園一枝及び拾遺は、殆一つ調子の歌ばかりである。誰とてさうでないとは言へぬが、彼だけの人に、どうして此用意が缺けてゐたかと思はれるほどである。結局彼は感情の種類によつて、心理昂揚の度の違ふことは考へず、又其に伴ふ生活律の變化などより外に、常に不變な調子があると空想してゐたのである。さうして其が、彼の謂ふみやびでもあつた。文學は優美でなければならぬと言ふことになる。其はさう當然思はれる筈で、而も此ほど亦、大きな過ちもないのである。かうしたみやびた調べを出す爲には、自ら題材にも選擇が加つて来る。其だけに取材の範圍が狭まると共に、之をひろげようとして無駄を重ねた處も見える。詞からみやびのしらべさへ出れば、俗事も歌に入れることが出来るとし、又俗語も全體のしらべの一つとして乗つて來れば優美なり得ると考へてゐたやうである。だが其は多く、一時彼がさう感じてよみ入れただけで、

今日においても、其語だけは觸りのぬめらかで、變に世馴れたやうなものを感じさせてゐる。さうした口語發想などと言つたところで、結局歌詞の持つ情調との妥協によつて、調和を感じるに過ぎないのである。俗語自身が、其職能を十分發揮する訣ではないのである。景樹においては、單なる試みとして過ぎ去つた。

春日野に若菜をつめば、我ながら 昔の人のこゝちこそすれ (春)
橋のなつかしき香にほふ夜は、わが袖ならぬこゝちこそすれ (夏)
雲よりさして來にける もみぢ葉の色は、夕日のこゝちこそすれ (秋)
梅の花散るにまがひて降る時は、雪さへにほふこゝちこそすれ (冬)
たまたれの小簾のすき間に 見すもあらずたゞ佛のこゝちこそすれ (戀)

この引用は、少々意地のわるさを感じる。唯彼の感動の行き互る限界が、可なり狭い間を動い

てゐたことが知れるであらうと思ふので、もつと適切な例も措いて、わざとこんなを出して見る。景樹の胸に來たものは必詩の感銘であらうが、彼には、口語發想を主張するだけのものが内在して、「こゝちこそすれ」と謂つた常識の説明に入れてしまふことになつたのである。千萬無量とも謂ふべきせつない感銘をすら、さうするのである。殊に春夏の二首の如きは、よくもかうあきらめたやうなぶつきらぼうな發想、仄かに温めたやうな調子で満足出來たものと思ふ。この單調なと見えるしらが、彼にとつては大きな誘惑でもあつたのであらうが、自分の欲するしらべに入れる爲に、題材自身が持ち、又言語相互の間に生ずるものは犠牲にしても、彼の好むたゞごと式であり、簡明でもある所の——さうして多量に大衆啓蒙の意義に立つたしらべにはめようとしたのである。春日野の歌は、物語の世界から現實の世界に蹴落されてゐる。「若菜をつめば、われながら……」。かうした物言ひは、彼の欲するしらべの弱點を暴け出してゐて氣の毒である。橋の歌でも、又しても、「わが袖ならぬ……」と常識表現に陥ちてしまつてゐる。其だけにしらべは、しらべ自身によつて、讀者の胸に内容を理會させる安全を十分に發揮してゐる。が、此しらべは歌自身を破つてゐることが考へられないであつた。歌の生

活と、調子とが背反になつてゐるのである。「雲より」は、しらべを以て、無理納得を強ひてゐる遺憾がある。不自然な調子で、自然らしい擬装を作つて簡明に流してしまつた訣だ。

彼のよい處をあげた先人は多くある。さうして其等は、彼の本たうのよい處を外して、缺點を長所と見違へてゐることが多かつた。勿論其中には、よい處を考へて居るものもある。私の論は、先人の議論の考へ直された今日において、尙景樹の永く生きる所を見出さうと努めてゐることにもならう。

短歌は最近まで、實に古典風な文學であつた。だから一般文學とは違つた所があつた。勿論今も多くは、其傾きを深く持つてゐる。さうして其が、今の處ではまだ、正しいやうである。新らしい感情・思想や、境遇・生活やは、極めて徐々に這入つて來た。さうした後入要素が、擬古風な短歌情調に妥協することととり込まれ、して來た。さうしてやつと歌の本質を破るものでない事を見出して、今度は其が舊來の短歌の内容にとつて替らうとしてゐる。此がし遂げられることか、どうかは、まだ、疑問である。だから、近代短歌では、どうしても古典風であることが、短歌の生命の繋る所であつた。古典風といふのは、言ひ替へれば、優美—

みやびだと言ふことになる。短歌において古典感を起すのが、みやびと言ふ精神だつたのだ。

此古典感を調節しようとしたのが、眞淵であつた。其以前からずつと古典に上の限界をつけて、古今以前に溯らうとしなかつたのが、短歌の世界のみやびであつた。其に更に萬葉を加へようとしたのが、從來の歌に馴れた人々及び其傳統に居る人々から、排斥せられたのである。さうして本質式短歌を古今集に認めてゐたのが、蘆庵・景樹を筆頭とする京都の歌よみ等であつた。此運動には、地方文學と謂つた色彩もあつた。萬葉ぶりを輕視しようとする傾向は、實は傳統短く、優美の根ざし淺い江戸の地に置いて考へたからであつた。王城を負ふ所の誇りは、京人のすべてに行き互つた感情であつた。地方出の歌人ながら、京に住み、京の人事自然に親しんで居ることが、さうした感情を導いたのだ。

其江戸の古學者とても、散文精神から見れば、平安朝のものであつて、其が和歌にも共通してゐるのが事實であるから見れば、短歌も長歌も實は、純粹な萬葉精神に立つとは言へなかつた。理論ばかりが奔つて高唱した。其が作物を大體、萬葉ぶりなる如く感じさせたのである。

古典の標準を平安朝に置くものは、古今集を以てみやびの典型とした。唯萬葉まで延長し、其

に古今以後までも互つて、優れた精神を見出さうとしなかつたのが、缺點であつた。みやびでないものは、如何に眞實でも問題でなかつた。此は古典文學である以上、短歌にとつて誤りではない。此短歌の上に、種々の感情や、生活を求めようとするのは、却て迷妄である。

だから、景樹が無條件にしらべとみやびとを並行するもの、ときめてかゝつて居たのも、意義がある。古典調子には、自ら古典精神が寓つて来るものとしてゐる訣である。謂はゞ語句・詞章といふよりも、其が醸し出す氣流の中に、古典精神を迎へ得るもの、と考へてゐたことと思ふ。此點、景樹門流多くは、皆さやう信じて、成心なき時に浮ぶ歌を重んじることになつて來た。唯、かう言ふ心構へは、詩として純粹なものを生むことが出来るけれど、天來の妙音を待つやうなことになる。作意企圖の露出せぬ柔軟、閑雅と謂つた詩の美德を備へた作品に逢著することはあるに違ひない。だが常にと謂つては、あり得る態度でない。其爲に、景樹自身すら、彼妙音を捉へることが、極めて稀であつた。彼は理論の雄ではあつた。だが其爲に、自らの心にある構へを生じさせた。作意企圖を却けて自然なものを獲ようとした彼にとつては、反對な結果が來たのである。

彼には、しらべの價值についての検査が足らなかつた。しらべがすべてを詩化するものと思ひ過ぎた。作物の上に出て來るのがしらべで、作物以前には情調であることを思はなかつたのであらう。しらべによつて、又すべてが解決つくものと考へた。だから、内容をなすべき感情・思想・生活などは多く問題にならなかつた。かうした立ち場からは、出來るだけ單純・平易なものがよかつた。最單純で平易なものは、現代生活の周知せられた斷片が持つ氣分である。之を文學化することは、野心を咬る所が多い。景樹は屢易々と之を捉へた。當時の世態人情を小さな一塊として、舌の上に上す風に、しらべに載せた。彼は得意であつた。だが、しらべによつて彼が試みた手品に過ぎなかつた。さうして手品は、彼自身の目まで昏ましてしまつた。其多くは、唯古典語で言つてよい所を、やゝ雅言もどきの口語まじりで發音したと言つた効果を表したに過ぎないものが多かつたと謂へる。其が如何に調和したと見えるか。調和したと見えると同時に、歌全體が低調に墮ちてしまつてゐる。併し景樹の心構へとしては、極めて自然に――又自然らしいしらべに乗つて出たものだから、品も破らず、歌の本質にも叶ふと見え、更に歌に新境地が開けた、とも思はれたのである。

だが、此は古典式作家が常にする遊戯だ。而も遊戯と言ふことが忘れられ勝ちなものである。彼は眞淵の如く雄渾を念願としなかつた。又理想だけでも高邁に持つことを忘れて居た。其と古今ふりから選擇したしらべとが相叶つてつくり上げた歌のすがたは、しなやかであつた。飽くまでも柔らかであり、弾力も備つて居た。併し高い精神に撲たれるやうな所は出て來ない。あまりに世馴れた物語り上手と言つた歌口であつた。くろろとの持つ滑らかさと、頼み難さがつき纏うてゐる。古典表現と調和する近代要素も、其が古代精神に通ずるものが見出された時にこそ、其詩の内容となることが出来る。さうでない限りは、歌には、さもしいしらべをうたふに過ぎなくなる。景樹の歌には、此點において遺憾乍ら、小唄調に陥つたものが、なか／＼にある。室町から江戸までの小唄が持つ味は、古代表現と近代内容との矛盾から來るのであつた。とは言へ、文學者としての景樹は、やはり小品作家としての素質に優れた人であつた。かう言ふ意味から、歌において最纏りの見えたのは、彼が第一である。歌人以外に生れなかつた人を江戸時代から求めるなら、私は彼を推す外はない。短歌作家として實に適切な能と智とを備へてゐたのも彼である。其は彼も自覺し、彼の追隨者も自ら感じて居たと思はれる所は、景樹の

持つ抒情質である。敘景詩を作る間にも現れて、作物の偏向を見せる感情要素の豊かにあることである。必しも抒情詩人と謂つた意義ではない。此あつて彼の歌は如何にも濫かく、懐しい感じを含んで來たか知れない。彼の歌には、彼さへ意識しなかつたと思はれるおぼろ／＼の匂ひが靡いてゐる。

若し景樹が世間の人に顔を見せることを厭うて、其性格や癖を人に示さなかつたら、どんなに懐しい人と想像せられたかも知れない。歌はさうした空想を呼びさうな作風である。

譬へば稍遅れるが、加納諸平一門の歌風である。熊代繁里・伴林光平・千家尊孫・小谷古蔭等の歌を見ると、師の作風と指導の痕とを示す如く、如何にも描寫の行き届き、又匂ひよき言語を連ねてゐる。寫生の歌とも見るべきものが多い。だが、靡きの残るものがない。景樹の歌を見ると、其がある。唯、しらべを頼み過ぎた彼は、内容を輕視し、又内容の排列を輕視した。其爲に靡くものが中斷して、讀者の氣分の迷ふやうなものが多く残つた。其點では諸平門流の人の行き届き過ぎた歌と、一つになつてしまつてゐる。彼の作として數へられてゐるものは、多くさう言ふ種類である。

明けてこそ 見むと思ひし宮崎の 波間に霞む 松の群だち

筏おろす清瀧川のたきつ瀬に、散りて流るゝ山吹の花

めせやめせ。夕げのつま木めせやめせ。かへるさ遠し。大原の里

いづくより駒うち入れむ。佐保川のさゞれにうつる白菊の花

照る月の影の散り来るこゝちして 夜行く袖にたまる雪かな

富士の嶺を 木の間このまにかへり見て、松のかけ踏む 浮島が原

此等にある飽き／＼した気分を感じるのは、耳に熟し過ぎたからではない。歌自身が持つ微温式な風流三昧と、大衆の理會點を知り過ぎてゐる所にあるのである。

部分には多少慊らぬ所があり、又は全體としては同感出来ないでも、一部に優れた詩を持ったもの、或は景樹獨得の氣魄を持ったものを擧げて見ようと思ふ。

春の夜のおぼろ月夜に寢覺めして、堪へずや、雁の思ひ立つらむ
常見れば、くぬぎまじりの柞原。春は櫻の林なりけり

傳へ聞く遠山びとの洞の中も、かくこそあるらし。今日の日長さ

歸り來て、解けども 解けずなりにけり。結びおきつる 青柳の絲

大空のおなじところに 霞みつゝ、行くとも見えぬ 春の日の影

春雨の日ごろ降りつる 小山田の苗代水は、今日も濁れり。

大空の縁になびく白雲の まがはぬ夏に なりにけるかな

夏來れば 世の中狭くなり果てゝ、清水のほかにも すみどころなし

一とせを待たむ別れにおとるへて、花のかつらも、萎む今朝かな

(七夕後朝)

わが宿は 薄穂に出でゝ、むらさめの降る日寒くも なれる秋かな

雨に夙くなりぬるものを 鈴鹿山 霧のふるのと思ひけるかな

松かけに立ちかくれても 見つるかな。あまりに 月の隈しなれば

山松の木の間に見ゆる 年どしの紅葉も、色はかはらざりけり
山川の岸をひたして行く水に、ぬるでの紅葉 散らぬ日ぞなき
埋み火のほふあたりは のどかにて、昔語りも 春めきにけり
埋み火のほかに 心はなけれども、向へば見ゆる 白鳥の山
白雪の降る大空をながめつゝ かくて 今年も暮れなむが 憂さ
雪枯れの聲さへ立てぬ 蕪竹の よに伏したりと 知る人もなし(忍逢戀)
夢なるか。我が手枕に 我ふれて、人のと思ひし 鬘の黒髪
かぎりなくかなしきものは、ともし火の消えての後の 寝覺めなりけり
つくぐと もの思ふ老いの曉に、寝覺め遅れし 鳥の聲かな
暮るゝより 松に吹き立つ我が山の嵐の末を 誰か聞くらむ
我が庵は、あまりに山の奥なれば、鳥の聲さへ 珍しきかな
今日も早 申のさがりになりぬらむ。とぐらにのぼる 鶏の聲
△つゞら籠をあけてやりつる放ち鳥。わが逃れしと 思はさらなむ

草枕 旅の空こそ かなしけれ。野にも 山にも 知る人はなし
はかなくて 木にも 草にも言はれぬは、心の底の思ひなりけり
朝戸出の袂は いまだ寒けれど、野は うち霞み、鶯ぞ鳴く
山雀のつゝく岡への うつぼ木の枝も ひと枝 春めきにけり
露だにも いまだならはぬ今年生ひの まがきの竹に、五月雨ぞふる
桐の花おつる五月の雨あめごもり 一葉散るだに さびしきものを
山の端すべに鼻はなかゞやく みな月のこの夜は、いたく更けにけらしな

大體此ほど挙げれば、もう恐らく桂園一枝及び拾遺には、物がなくなつた思ひがする。歌柄は、
拘泥せぬやう／＼と努めて居たらしく、一見柔軟に見える。が、實際は、全體を通じて、重く
ろしく感じる。どうも本格式に進まうと言ふ意思が、煩ひをする。珍しく態度に災せられたも
のと言へる。だが、理論に生活味を帯びしめたのは、昔においては、景樹一人位のものであら
う。とにもかくにも、彼は蘆庵あつての彼であつた。蘆庵の暗示を具體化した彼でもあつた。

十一 加納 諸平

露霜ツキの秋さり衣吹フキきかへす風をときじみ、蘆垣アシガキのまがきに立ち
て、もみぢ葉ハのすぎにし人を うつらく 戀コイひつゝをれば、
蓼アサギの穂に 夕日くだちて、雁鳴カニナリきわたる

中村良臣が身まかりける年の九月の末つかた、秋哀傷と

いへる心をよみて、と其子良弼が、こひおこせければ

短歌史の此部分を綴つてゐる昭和十三年の詩壇では、一方に古典的な長歌の存在が、尙未、認められてゐる。さうして、其作家らの標準から見れば、此作物の値うちは、相應に高くつもらねばならぬ筈である。稍景物の配合に古風な處こそあれ、其引き緊つた製作力、感動の適切な

淘汰性、古びない色氣、此があゝの登巴嶽——今の大臺、原山——時作歌を以て、世間にもて囃されて、無感激な作家の一人と見られて居るかも知れぬ加納諸平の作物なのである。登巴嶽の歌にも、勿論盛んな製作力や、部分的な緊迫感は見られるが、世の紹介者の言ふのは、そんな點ではない。萬葉風な長歌作家としてである。萬葉風の作家だと言ふ考へ方が、諸平の短歌の方にも及ぼされる爲、唯其だけをめぐにして、柿園詠草及び柿園詠草拾遺にはひつて來た人々は、大きな失望をさせられずには居なかつた。其が、諸平の歌の値うちぎめの上に、大きなたらいて居る。無造作な昔風の人は、加納諸平を相應な作家として位づけするが、其鑑賞する所を見ると、此が亦、諸平の爲の大きな煩ひになつてゐることが知れる。其等の人のあげる引用が亦、大凡諸平の姿を傳へきれぬものであるから。
諸平は、純然たる萬葉ぶりの作家と言ふべきではない。江戸末期に若干出て來た萬葉ぶりの歌よみは、多く萬葉以外を知らなかつたから、と言ふことが出来る。だから勿論、同時代の歌人は、さう謂つた見方から、萬葉狂ひの歌人として輕視して居た。此見くぶり方が學問の上においては正しいかも知れぬが、作物其物の批評としては、亦的のはづれて居ることが多かつた。

學力が薄いから、萬葉だけでとり繕つて居たからと謂つて、作物が必しもよくないものばかりはなかつた。だがさう謂ふ、萬葉集に對する一知半解から出た萬葉ぶりよみが、相應にあつたことも事實である。

新派短歌が盛んになり、萬葉派が勢力を獲て後も、やはり誰某は萬葉ぶりだから、氣魄があると言つた見方が行はれた。其は、碯の石の中から珍しい珠を發見したやうな喜びが、さうさせたのだが、やはり正しい見方ではなかつた。今日においても、改めねばならぬ謬論が澤山我々に残されてゐるのである。

諸平は、歌においてあらゆる知識を持たねばならぬと言ふ、王朝以來の歌學者としての正しい立ち場を守つて來た。其が又災ひとなつて、彼の歌を無用の技工、感覺を蔑視した知識歌に墮ちさせた。その憾みが深過ぎるほど、彼の作物に出てゐる。尤、此點では、江戸の相當な歌人に、さうでないものは尠い。其を免れたのは、傳統の乏しい、學問の貧困を萬葉ぶりで糊塗した人々だけ、と謂つてもよい程であつたのだから。つまり江戸までの傳統正しい歌人の立ち場は、さうだつたのだから、文學に縁遠い立ち場を守り乍ら、文學を爲さうとして居たものと言

ふことが出来る。だから、諸平などについても、さうした學問に囚はれた癖を、一應は引き去つて、文學の形に直して見ると、可なり純然たる文學者素質が出て來、作物においても、其氣稟が窺はれるのであると思ふ。

姫島の松の夕日に 雁鳴きて、わが子戀しき秋風ぞ 吹く

海邊夕

海邊の夕と言ふ與へられた題を、作者は防人の生活に延長して來たのである。此姫島を難波の姫島だと考へてゐる人も相應にあるやうだ。豊後の姫島が防人の一屯所であつたことに氣づかないのは、讀者の方が、諸平よりも其點だけでは物識らずであり、又忠實でもない訣である。さうして見ると、なぜ我が子戀しきかが訣る。唯聊か戯曲式な興味を持たせる嫌ひがないでもない。つまり、作者同等或は以上の學者に讀ませるつもりが、昔から歌にはあつた。其が、作物の普遍性を缺く訣にもなるのであつた。だが、諸平の此歌の場合、必しも作者ばかりが責任を負はねばならぬ程、文學から離れた知識の遊戯には陥つて居ない。作物自身にも、相應の用

意は積まれてゐる。「わが子戀しき……」と謂つたとて、諸平自身の子を思ふ或は、其に似た境遇にのみ寄せて考へるのは、地力の薄い鑑賞者である。又、姫島と雁を配してゐるのだから、記紀に現れた 仁徳天皇と武内宿禰の難波姫島の雁問答の詠を思ひ浮べて、難波だと主張するのでは、却て昔の作家の卒業した固陋癖に更めて陥ることになる。諸平のことだから、姫島と雁―雁の卵と我が子―かうした連環は心に持つてゐるかも知れぬが、其は一つの沈めた技工で、彼こそさう言ふ點で、新しいに似た試みをした第一人と言ふことが出来るのである。無用に語を据ゑぬ、何かの點で緊密性を持たせる―かうした大切な用意を、昔の歌人は、技工の一つとして用ゐたから氣の毒だつた。姫島と言つたから、當然聯想せらるべき雁を持ち出したのは、度を越さない限りにおいては、わるい事ではない。此が正しい方法なら、過剰にならぬ限りよい事と言はれる筈なのに、歌には其を必しもよいと言ひきれない、病的な形式上の匂ひを、長く貯へて來たのである。

浪風のうちみだりたる我が髪を 誰か かゝげむ くしもとの浦

熊野旅行をくり返したをりの心覺えの作物の中の一つで、名高い歌である。東牟婁郡串本浦での作か、追憶かであらう。旅愁を歌つたもので、誰の胸にも一應は來る筈の作である。さうして殊に下の句がねばりついて來るやうな情を湛へて居る。但、串本の地名から櫛を聯想したのであるが、古代の歌になら許して來てゐる事も、現實感を持たねばならぬ近代の物だから、ちよつと胸にこじれが來る。之を看逃すのが、舊派と謂はれる人たちである。だが、私はかゝけむなる櫛に適切過ぎた縁語の感じの深い語を改めれば、このまゝでよいと思ふ。歌にはさうした古典式病所が亦長所ともなるのだから。とり、見むとすれば、色氣も出て來るし、縋りよるやうな寂しい心持も、出て來るのである。さうして、櫛とも縁がきれないで、又即き過ぎずにも行く。今一つは、うちみだりたるである。熊野の荒灘を越え、深山を涉つたのだから、浪や風に、髪も髪もむちやくちやになつてゐるのである。だがなぜ「吹きみだりたる」と言はなかつたらう。さうすれば、浪風が一つの語になつて、海を渡るのに、汐風に荒されたことになる。其點を用心して、うちみだりで、柔軟な感じを出し、浪と風とを分けたのであらう。だがさう

した細い區別を立て、見たところで何にならう。結局心を打つものは、旅にやつれた髪形を、世話やく妹もないことである。私は「浪風の吹きみだりたる」と、はつきりかたづけける方が、よいと思ふのである。作物を矯めて見ることは、わるいとする人が必あるだらう。だが、古典式作品の形式約束から、必要以上——と言ふより有害なまでに、表現様式が拘束せられてゐる。さう言ふ約束に乗つて、其が又馴れから快く感じられる作家には、思はぬほど、効果を犠牲にすることがある。其を救ふのが、ほんたうである。元々何も作り直さうと言ふのではない。作者は、かう考へて居た筈が、かう曲つて現れてゐるのだ、と言ふまでである。かうした試みが行はれなければ、古典式作物は、正しい作者の意圖を顯さないでしまふだらう。作者の意圖と、時代の表現法との交渉について見るのも、鑑賞者としては、大切な用意である。

あす伐らむ舟木が中に、もみち葉のこがれて見ゆる 足柄の山

名所紅葉

紅葉の、末になつてちり／＼に捲き焦げて、黒みを持つて来る頃の色をこがると言ふのである。

其へ、煩悶すると言ふ人間式の心持を重ねて表したのだ。歌における懸け詞は、かう言ふ風に融合しない混合状態のまゝで効果を示す。さうして其が假象として、一つになつた感じを持たせる。紅葉の焦げて見えるのを、まるで明日伐られることを思ひ煩つて居るやうに詞だけとりなす。讀むと、煩悶が色に現れて焦れるやうに感じる。歌特有の表現であり、不安定なものをも残す。今の人こそ其がどうしたのだ、と言ふ位に閑却する、やはり同情を木に寄與して、木がさう思つて居るらしく感じて居るのであつた。懸け詞の弊を除いて考へると、此人のよい素質を見せて居る。唯歌の表現法における固有の不安定性を利用した處に弱みがある。舟木を樵り出すから足柄を出したが、歌の自由が此地名で堰き止められる。「明日伐らむ……」は、明治の新派の興らうとした間際まではたつきかけて居た新古典派は、一直文・義象等の一派——こまでも達して居ない。だがやはり計畫が計畫として、露骨に見えず。併し趣向としてそこまでつつこんで來なければ、興味をひくことの出來なかつたのも事實だらう。恐らく、諸平などの知識から言ふと、此歌の今一つの基礎は、「奥山に立てらましかば、渚漕ぐ舟木も今やもみちしつらむ(惠慶)」を持つてゐて、其を逆表現した所に「學者歌よみ」らしい處があるのだ

らうと思ふ。けれども、其は、此歌の鑑賞の碍カサにこそなれ、得にはならぬ。かう言ふ詩人としての氣稟を十分持つて、而も最癖の多かつた文壇時代に出て來たのだから、そこに素質と環境との交錯が、複雑になつて來てゐる。而も時代の爲に隠れきらぬよさを示して居るのに、氣づかない人が多い。又彼を讀する人も、此點に觸れないのはよくないと思ふ。

和歌山藩醫加納伊竹の養子であつた。杏仙又は杏仙郎と言ふのは、家職から出た稱である。國學者の中には、長袖殊に醫師が相當に多かつた。だが、其學統の上から極めて密な關係であつた本居宣長が松坂の町醫であつた點など、彼にとつては、深い因縁を自覺せず居られなかつたであらう。加納氏を相續するやうになつたのは、彼の實父夏目蕪麻呂の爲であつた。蕪麻呂は、宣長門であつたが、當時の歌人・誹諧師がさうした通り、郷國遠州白須賀を出て諸國を游歴し、旅の間に生活して居た。文政五年、中村良臣の住地攝津伊丹に滞在して、昆陽ノ池の月見に出た夜、月を捉ると言つて、酔うたまゝ池に入つて死んだ。此事、幾分杜甫の溺死と似てゐる。旅中常に從うて居たのは、神童の譽れ高く、兄瓶エカと既に稱してゐた彼であつた。此年、十五になつたばかりである。思ふに、良臣等の斡旋によつて、其師であり、又蕪麻呂には

同門であつた和歌山の本居大平オホヒラの手で、加納氏に入籍したものと思はれる。其だけに、長男である彼を旅先のまゝ、而も父の死と共に、他家へ遣はした夏目家の落寞たる有様が、考へられるやうである。其によつて、蕪麻呂の旅が、どんな意味であつたかと思はれるのである。だから當然、大平を師と仰ぐことになつたのである。諸平の名も、大平に關係のあるものであらう。

文政九年の春夏かけて、遠江にまかりける時、道にてよめる歌の中に、

春霞 立ち出づるからに、里の犬の夜聲は絶えて、雉キヤウなくなり

旅衣わゝくばかりに 春たけて、茨ウツギが花ぞ、香カに匂ふなる

(三首の中一首略する。)

諸平二十の年である。其去々年加納家に入つて居る。だから、一年置いて初めて歸省したものと見える。數へ年二十歳の青年の歌である。後年の手入れは固より考へねばならぬが、前の歌

には多少の實感が窺へるし、後の作には、若い感傷がみづ／＼しく出てゐる。

旅衣がわ／＼ける程になつたと感じてゐるのは、多少誇張を含んでゐるが、詩としては、其が實感の程度に達してゐる。つまり妥當性を持つて居る訣だ。旅の日數の重つたと言ふ、季節の倦い感じと、海道ばたの野茨の花の色及び香。此歌、作り物ではないのである。美しさは固よりある。だが、此程度の美しさを否定するだけ、他の文學も變化はしてゐない。唯美しさにくるみこまれた實感の鈍りが惜しまれるのである。だが當時の文學は、現實感を出すものを賤しいとした。實感を却けなくなつたのは、明治文學でも、自然主義以後であつた。誹諧においてこそ、當時も實感は認めたり、否認せられたりしてゐる時代だつたのである。

諸平は、技工萬能主義のやうに見える。如何にも楽しんで、其をしてゐるやうだが、實際はさうした馴れを離れた述懐・懷舊などいふ種類のものに、優れたのが多い。

わが身こそ よそにも移れ。萩が花 もとの垣ねに、やつれてぞ咲く

本生父翁の靈祭に、寄萩懷舊といふ題にて、人々と共によめる

一二句のくどき過ぎることが却てたゞごとらしく歌を感じさせるが、其一二句は生きてゐる。

此も物語歌らしく、響く點はないでもない。抒情の輪郭を述べると、敘事になるのである。

諸平は、歌集の中に屢萩の歌を讀んでゐる。さう言ふものの中には、互に支持しあふと言ふよりも、ある一首の値うちを爲に、他が引き立てられる——即、其によつてある深みが附加せられて来る——と謂つたものがある。此は柿園詠草に限つたことではなく、連作なるもの値うちもある點までは、さうした言はず語らずの約束が響いて来るのではなからうか。

ふる里のなつめがもとの 萩が花 こぼれにけらし。秋風のふく

(縣居翁靈社に献つた歌の中)

此歌はどうも名高過ぎて鑑賞に警戒を要するやうな氣がする。——さう言ふことはあるもので、又さうしなくてはならないことが度々である。が、歌自身は、やはり製作當時油のつた勢にかゝつて多く詠んだ爲か、——夏目氏を利かしたことを念頭にかけて、よ

く感じられる。——と言ふのは、古人——作者——の満悦を無視することになるが、其はほんの大したことでない技工なのだから。棗の木にあつたところから出た夏目氏だと思ふことが出来れば、歌の味ひの邪魔にはならない。

この歌・かの歌通じて、萩が母の聯想を含めて作られてゐるやうである。尤、「人知れず思ひみだれてしのぶかな。萩の下葉のうつり來し世を」では、又別の位置に心を置いては居る。

右の歌は、嘉永二年の秋、遠江掛川で故夏目爽麻呂の廿七年忌歌會をした、と聞いて作つた「秋懷舊」の作である。翌年

「九月、弟のとひ來て、懸川の會のことどもこまやかに語りければ」とあつて、

掛川の里わの眞葛　くり返し、とへど　語れど、うらぶれにけり

昔の歌としては、事もなげによんだ一二句に不審はあるが、却てことごとくしいものを持つて感じないのが、今ではよい。三句以下は、先の歌とは違つて、敘事には陥つて居ず、さうした詞を使ふ事で抒情を深めてゐる。かう言ふのが、詩人としての天成を思はせる歌である。若い頃の歌では、

の歌では、

二十まり一つになりぬる年の春

ますら雄がうちもかへさぬ　山陰の　はたとせ　何に過し來つらむ

「歸去來兮。田園將蕪」の心持を若々しくしたので、身は和歌山にあつて、かすかに暮す白須賀の里を思うたのである。ますら雄なる語が、國學者である彼の知識では、單に健康な田夫位の義に使つてゐるので、慷慨の氣を持つてゐるのではない。一人前の男の自分が居り乍ら、其まゝになつてゐるふる里の山陰の畠——そのはたちになつた自分、此年月家職を見ずに、他郷に過して來たことを歎いて居るのである。此歌を見て直に感じるやうな、壯夫、無爲にしてゐることを、慨んだ種類のものではない。

廿三歳には、選集『類題鮫玉集』第一篇を出してゐる。前々年文政九年には、其撰が成つてゐたといふから、若い彼の爲事に驚く。其選歌の標準も、信頼の出來るものであるし、範圍も廣

く同時代人を網羅してゐる。最初から出版を思ひ立つ年でもなく、又其だけの印刷の自由もなかつた時代だから、自分の好みで集め出したものが堆積したもの、と見るが正しいのではない。國學者の多くが、最初試みたのは、此歴代和歌の抄出であつたことを考へれば、其の大爲掛けなものと云ふだけのことである。だから先輩の歌なども多く選り入れてゐる訣なのである。彼の師は歿する二年前——即大平七十六の年——、四十歳の堀内遠を迎へてゐるが、鯁玉集の出来る前後は、老年の師の傍に侍つて、重用せられてゐた諸平だから、此鯁玉集にも自ら師の息のかゝつてゐることを、人に感じさせて居たことと思ふ。此選歌といふことも、時代の流行となつて來てゐたことは固よりだが、大平自身も非常にさうした事に興味を持つたのか、萬葉山常百首、近世三十六人撰以下多くの選歌集を作つてゐる。其影響のあるのは勿論だらうが、其には今一つ、遠因らしいものがある。其は寛政十二年に、大平の撰つた縣門長歌集「八十浦の玉」に關した事である。おなじ縣門の先輩江戸の村田春海から抗議を受けた。其とは、内容も種類も、亦固より態度も違つてゐるが、何か相通じるものがあるやうである。殊に歌においては、古風新風に廣く興味を持つことを立て前として居た本居派の事だから、凡彼の標準からよ

いと思はれるものは、派の如何に拘らないで居る。が、此短歌集の名が、鯁玉集であり、彼長歌集が「八十浦の玉」であることを思ふと、單に名を摸したと言ふだけでなく、ある意圖の、必あつたものと言ふ氣がする。此選集について言ふべきことは多いが、今は避ける。唯、かうした試みが、彼の歌人としての位置を、段々高めて行つたことは確かである。其爲却て、彼の學問は、眞價だけに評價せられないし、又彼も歌の方に囚はれて、學究の述作をする暇が、わりに少かつたらしい。此點は、學者としての天稟の豊かに示された竹取物語考・枕語解などを見ると考へさせられる。彼の研究法には、近代式な科學質も、彼らしい正しい直觀性も現れて、比類渺い立派なものである。

彼の學問がもつと大きくならなかつたのは、文學者としての煩ひの外に、其に伴ふ規律の乏しい生活が、煩ひをなしてゐる。彼には恐らく、幼時常に傍に見た父の流離の生活と、飲酒の惡癖とが、身に沁みて情なかつたに違ひない。又師大平なども、この事を戒めて居たに違ひない。然るに何時か、彼も大酒の人になつて居た。柿園詠草にある酒興の歌でも其よしは訣る。

九月十三夜、憐霞樓の宴に侍ひて、(十三首の中)

月に聞く波のひゞきも 絶えにけり。誰か 浮き寝の袖しぼるらむ
月にうつ大城の鼓 暫し待て。くだち行く夜を 誰か惜しまぬ
月に吹く市井の植ゑ木の風 高み、塵も残らず 晴れし空かな

皆、酒氣を帯びての恣な調子によい處があるのである。又、相應に知られてゐる
我醉ひぬ。今は、ひさごを鼓とも 打ちてや、月の影にうたはむ
などは、興がり過ぎて、人の思はくを憚らぬやうな厭みが出てゐる。

(弘化三年カ)道頓堀のやどりにて、曉深く起き出て、春曉月と言ふ題を出して、歌よみける
に、熊代繁里が上句を誦するつく

「堀江川 水かけ霞むあり明けに、」うかれ心の果ぞ やさしき

遊蕩心を文學にするのも一つの文學だが、此は恐らく恥しきと言ひ乍ら、額を叩いて居るやう

な氣持もあるが、反省後悔が軽く出て居て、歌としては、變つた感情を出してゐる。

嘉永元年は夏に煩ひ、冬再び病んでゐる。其から思へば、二年九月弟の訪うて來た時の歌と言ふのも、病中の作だらう。其だけに歌をなす深い力が思はれる。

嘉永元年の夏、いたく煩ひける程、古蔭(小谷)が、朝顔を小鉢に栽ゑて見せけるに、日にあたらざれば、終日しばまざりけるを見て、

ゆふべまで咲く朝顔の花見れば、一日も 千世の心地こそすれ

神のけにやありけむ。嘉永と改れる年の暮れなむとする頃より、こゝち損ひてかき籠りけるを悲しびて、……云々」

夢ごゝちに思ひつゞける歌。(嘉永三年ばかりにや)

みなとのうしほのくだり 如何さまにくだり行く世ぞ。地震ふりて屋庭を覆し、山裂けて水田を埋み、飯に飢ゑて人はこや

せど、よき人の書きて傳へし古の書とりはしく、玉をしもこと
(こゝ?)
と數へて、其が剩り臺に建て、川竹の夜聲ぞゑらぐ。鳥の如
立ちか舞ふらむ。のろの如守らひをるか。あらがねの 地に俯
居爲 人さには歎かふものを、人さには悲しぶものを 大直日
直日の神の神み魂荒びにけらし。少女らに男立ち添ひ、掌の
音もやらゝに 打ちならす左右を田に墾り、種蒔く見れば

此最後の長歌も、病氣の間の歌と思はれる。唯「神のけにやありけむ」と空呆れしたのは訣が
あらう。柿園詠草拾遺を見れば、嘉永元年の作らしい長歌「十月三日、冬至なりけるに、四日
の巳刻より……地震ふりけるほど、見聞きける事どもを、後に思ひつゞけたる」としてあるも
のは、又、又としてすべて五首續けて作られた長歌が並べてあり、次に十二月、魯西亞の船の
伊豆の海に沈んだのを、「……わた中に沈み失せぬれ、神風と讀へざらめや。そこよしと聞かず
てあらめや。然れども、八十の國への夷らはいまださやげり。あきつ島 四方の國人。君が爲、

神をいはひて、とき待ち居らむ」と歌ひをさめて居る。此二つが註釋にはなるやうだ。

諸平の病氣は、酒から來た精神系統のものだと言はれてゐる。其が「神のけにや」の理由であ
る。若い時諸平の教へを受けられた内遠の子本居豊顯先生は、私の問ひに答へて明らかにさう
言つて居られた。だが一方、私の中學時代に漢文を習うた伊藤介夫先生は、——大阪の宿儒で
あつた——之を諸平の歌の門人伊達千廣——陸奥宗光の父——の事に關聯させて説き聞かされ
た。千廣のある陰謀の書狀を途に拾うて、之を示して諫めたのを、却て諸平亂心と稱して幽閉
したので、と細かに事情を話して居られた。今になつて見れば、其どちらが正しいか。誰に問
うても、明らかに出來まい。唯歌から見れば、亂心したらしいことも事實だし、其間に、國
を憂へて居たらしい様子も窺はれる。門弟伴林光林が國事に死んだのは、諸平の死んだ安政四
年から七年立つての事だが、多少關係は考へられないでもない。純文學者肌の彼の事だから、
國事を歌つても、なまな作物にはして居ない。勢ぬるいやうな、顧て他を言ふ風に見える所は
ある。が、此等の事情が、絡みあつて諸平自身もうつら病ひと諦めて居た月日があつたものと
思ふ方が、當を得てゐるのではないか。麁麻呂の遺傳も、十分に考へられる彼である。だから

私は、前は眞に發作を起して數月病み、後には其を口實に、暫らく謹慎生活をしてゐたのではあるまいか、と言ふ考へも持つのである。どうであらうか。

彼の作品中、最油ののつてゐるのは、前に述べた「縣居翁の靈社に献らむとて、くさくさ」の歌よみける中に」とある十九首である。其中、

ふる里の岡への董 手につみて、いとゞ 昔の春ぞ戀しき
櫻花、散らば散らなむ。とほつ神 わが大君の華蓋キヌガサのうへに
ふる里の岡べに立ちて、わが見てし富士のみ雪の、とはに戀しき
世の中はかなしかりけり。世の中の何かかなしき 賤シノの男にして
引馬野ヒキマノの木の芽 はり原入り亂れ 春日暮ハルヒノクすは、昔人かも

特に名高いのは、熊野巡廻の時の歌である。

沖離ウツリけて浮ぶ鳥舟。時の間にかけりも行くか。鯨魚イサナ見ゆらし

ひし投げて 鯨クジラつく見ゆ。逸鳥の翼が上に 誰か立つらむ

み山木の幹モト伐り断つと 斧とれば、空もとゞろに あらし吹くなり

(巴嶽に登る途中で、假庵を作る)

ますら雄がすべしもとゞり 解き放つ瀧の響きに、雨みだるなり

那智瀧

傾きし軒の笕ズネの水槽に、涙も浮ぶ 昔語りか

(在田・日高二郡を二度廻つた時)

神無月 春ごゝちにもなれるかな。花の窟ウツに、花祭りして

(十月二日、有馬村で、菊・鶏頭の花など携へて参る)

みよしのゝ 奥に思へる心さへ、身さへ、山路を分け辿りつゝ

驛長ウチヤラサ 竹の小筒を吹くからに、山のかひこそ 聲あはせけれ

近露の里にて寢覺めして

山賤ヤマシノが 餅モチにせむと木の實搗き 浸す小川を またや渡らむ

門過ぐる風をしるべに、かしのみのひとり出でゝも拾ふうなるか
契りありて、露もおくらむ。賤が樵るつま木の道のやまとなでしこ

凡百首の中から、前に抜いた二首の外に、此だけ採つて見た。此外にも名高いのが大分ある。多くのさう言ふ歌は、大抵、何とか甘い處があるので多く棄てた。人に喜ばれるのは、其人の作が其程度だ、と實際讀まぬ人に思はせる嫌ひがある。諸平も、さうした煩ひをうけてゐる。

此等の中には、あまり抜かれないのがあるのも、不思議である。萬葉ぶりと簡単に褒めてはならぬ。其時の感じをびつたり出さうとして、自然に出て來た拍子である。だからも少し複雑なものを含んで居ると見る方が本たうである。「傾きし」の歌は、諸平らしい抒情味が十分出てる。四句が少し冗辯。花の窟の歌は珍しく軽い氣分になつて居る。橘曙覽にでもありさうで、詞相互の關係は、今少し粘著力がある。「みよしの」の歌は、吉野朝の御末 自天王以下の御事蹟を書物を通して、心の底深く思うて居たのが、今身すら山路を分け來て居ると言ふのであ

る。五句は弱いが、諸平風の説明である。心をこゝまで持つて行くのは、平凡人ではない。「驛長」は、朗らかな諧謔を採つたのである。竹筒に對して山の峽を貝にとりなしたのだ。今の人は、貝の事など思はない方が受け容れ易い。唯昔風の鑑賞家がかう言ふのを擧げないのは、古風な歌のよさと言ふものをどう考へて居るのか。「山賤が」は、相應に引かれてゐる。激動以外に、靜かな省慮を詩趣の中に數へるやうになつた自然主義影響以後の鑑賞法に入る。一二三句に互つての敘述がくどくて抒情より敘事に傾きかける緩さはあるが、かう言ふ氣持にも時々觸れた人として、此歌は逸せられない。「門過ぐる」も軽さと幼さと、おどけの中に、昔の歌らしい穩やかな慰めを感じさせる所を受けとつて欲しい。最後の歌、形は古い。でも發見は新しい。人知らぬ山路の而も偶然目に觸れた撫子、其上にかゝつて居る露に心づいたのである。「契りありて」を「露もおくらむ」に繋げてゐるが、實は其を見た瞬間にかうした山路に來て、かうした何でもない事に目のついたことに對して、ある値遇の感を起したのである。此は爲立ては古いが、類の少いものとして注意したのである。

霜とくる 枯れ生の茅生の朝じめり。やがて春めく日かけならまし
仰ぎ見し廬のけぶりの末よりも 高き山路を のぼり來にけり
風やどる御嶽の野蕪 矢に矧ぎて、射つらむ夜はの 響き高しも

—源三位頼政

きさらぎの ついたち頃の夕月夜 心にくも 霞みそめつゝ
咲く花の梢をつたふ川風に、みだれて寒し。鶯の聲
行きかへり 見れどかなしき花のうへに 霞む春日も かたぶきにけり

—芳野懷古

夕月夜 ほの見えそめし紫陽花の花も まどかに咲きみちにけり
あしがきのみだれをかこつ雨の中に、色もくづれし紫陽花の花
刈りしほの麥の朱ら穂 あからかに夜さへ見えて、螢飛ぶなり
常世物 花橋の追風に、足代の湊を朝びらきせむ

船まどの秋のともし火 ほのくくと白める海に、月は浮べり
山里は まだき夜寒になりぬらし。眞柴のけぶり 月に立つ見ゆ
小雀鳴く秋の野寺のひと垣 ひま見えぬまで 萩は咲きけり
雲霧のたゞよふ山の椎がもと。今日も いくたび雨はこぼれし
山寺は 曙かなし。紫の雲路をつたふ さを鹿の聲
み狩立 御野のこがらし寒ければ、鈴のゆらぎに、雪ぞ散り來る
思ふそら 安の川原もありと聞く 雲の上こそ戀しかりけれ
岩が根の朽ち葉に 雪をこきまぜて、楳おし靡み 嵐ふくなり
岩崩えて磯回の城門は荒れにしを 夜聲寒くも 寄する波かな
わたつみの浪もてかくすふる里を 浮き寝の夢に 今宵見しかな
足ふめば、霜くづれする赭土山 立ちや疲れむ。霧のみ中に
深山木のもと伐り断つと 斧とれば、空もとゞろに 嵐吹くなり
雲間洩る秋の日かけも むらさきの 古坐の巖に傾きにけり

神ならば 岩押し分けて歸らまし。山路の暮れは、家ぞ戀しき
天つ日の影もそがひの 古壁に、いつまでかれぬ草の根さしぞ——達磨
山里のそともみ蔭 吹く風の音もさやかに、なりにけらしも——風鈴
神無月 立ちにし日より、あしびきの 山さへ もろき色に見えつゝ
山畑の麥の初蒔き急ぐらむ。なゝめにも降る むら時雨かな
あな寒の 夜はの衾や。河風に 身をわび人の聲もたぐひて
を萱原 雪を吹き解く風弱み、野火の煙のむすぼゝれつゝ
山百合の おのづからなる花の香も、松の戸洩れて 清き月夜か
かきこもる那智の御山の 霜ながら 今朝の朝菜に 菊やつまゝし
橋のときはの蔭と なびき寝し その夜も夢か。あとの若草
朝なく 庭立ち馴らし 見る毎に、知らぬ緑の色まさり行く
春日さす南の庭の 雪消よりかけろふばかり 梅が香ぞする
夕されば、雲雀の聲のさゝ波を 麥生によせて 春風ぞ吹く

櫻咲く片山すげの根來寺 何時の春待つ室のとさしぞ
國見すと のぼれば、寒き山風に、けぶりを洩るゝ花は 誰がかど
五月雨の雲間の夕日 下照りて、島の橋 露かをるなり

諸平の歌は、當然、再見返される時が来るであらう。但、彼の當時、たけ高しと見られ、自分も負うてゐたらしい歌口は、相當、鑑賞の妨げとなるであらう。彼の情熱は、歌ひ上げることによつて、解決のつくものと考へられてゐた。併し、其の過重した姿の喜ばれる日は、まづありさうも思はれぬ。文藝家にも、生得の幸不幸はあるものである。

十二良寬

唱導詞

風俗年々薄、
 人心時々危、
 師盛唱宗稱、
 師資互膠漆、
 法、倘、可、立、宗、
 人々共立宗、
 諸人且勿喧、
 朝野歲々衰、
 祖道日々微、
 資隨而和之、
 守死不敢移、
 古聖孰不為、
 嗟我焉適歸、
 聽我唱導詞、

唱導自有始、
 佛是天中天、
 佛滅五百歲、
 大士方此世、
 唯道以為任、
 自佛法東漸、
 吾師遠來儀、
 彼大唐盛矣、
 領衆兮匡徒、
 頓漸雖逗機、
 迨此有宋末、
 請從靈山施、
 誰人敢是非、
 人二三其儀、
 造論歸至微、
 何是復何非、
 白馬創作基、
 諸法頓有歸、
 罔美於斯時、
 箇々法中獅、
 南北未分岐、
 白璧肇生疵、

五家	馭露鋒	八宗	竝驅馳
餘波	聿遐施	殆臻	不可排
粵有	吾永平	真箇	祖域魁
夙帶	大白印	扶桑	振宗雷
大哉	擇法眼	龍象	尙潛威
盛矣	弘通任	靡幽	不蒙輝
垂輝	及島夷	合創	皆己削
合施	皆己施	自師	去神州
悠々	幾多時	枳棘	生高堂
蕙蘭	草莽萎	陽春	孰復唱
巴歌	日盈岐	呼嗟	余小子

遭^ニ遇^ス於^レ此^ニ時^ニ一^〇 大厦將^ニ崩^ル倒^セ
 非^ニ一^ノ木^ノ所^ニ支^ル一^〇 清夜不^レ能^レ寐^一
 反側歌^ニ斯^ニ詩^一

良寛の詩における力量は、恐らく歌の比でないと云ふやうな気がする。勿論人の言ふやうに、様々な諸病を犯して顧みなかつた所は多い。だが、かうした長律の數篇に到つては、誰が本格のものでないと謂へよう。感動を堂々と陳べて行くのに、如何にも敘事詩らしい行き方で、暢達を失はないのは、盛唐の詩人の風である。

私は實は、傳説の良寛に目を晦まされて居たのであつた。いや、人が傳説によつて、良寛の作品を解釋し、鑑賞しようとして謂つた態度を、殊に極端に却けて來たものである。私の先輩や友人の多くが、良寛を尊敬することに反對し續けた。さうして其を、良寛傳に晦まされたものとした私だ。其爲、ある最好き友とも、文學上に相訣れなければならぬ因縁の、大きなものを作つたやうに思ふ。私は、懷素を學んだといふ良寛の草體の字の巧な點をあげて、却て張旭を寫し

たものとした。而も其巧慧な筆鋒を見る時、誰が傳説上の良寛を其まゝ作品の註釋に使ふことが出来るものか、とまで極言した。其事あつて後、其友人は私に向つて、良寛のよさを説かなかつた。つまり、學究の末流であり、又結局中古式な歌に興味を棄てることの出来ない者として、私をその朋黨の意向に同じ難い所を持つもの、と思ひ初めたのだらうと思ふ。其友も今は亡い。此文が、或は死後其何年の追善の爲の好意を含んだものだとも見られれば、此ほど嬉しいことはないのである。

良寛があつた人格であつたことは、固よりその素質にあつたのは言ふまでもない。だが、其質自身に眞の得道の碍りをなすものも多くあつたことも否めない。其を苦しみ鍛へて、あれまになつた半生以上の修練を考へないのは大きな誤りである。こんなことは言ふまでもなく、誰しも思うて居ることであらう。だが良寛僧を思ふ時、ともすれば、其辛苦の經歷などは、念頭を去つてしまつて、唯生れ乍らの珠のやうな人格——其人格から、文學も自由に流れ出たやうに思ふのは、あまり無反省だといふだけである。

良寛は、何も初めから國上山下の田舎の寒僧ではなかつた。正道の修業を積み、接すべき知識

には接し、又自らも、廣い世間から相當に認められて居た人なのである。

「伊昔少壯の時、錫を飛ばして千里に遊び、頗古老の門を叩き、周遊すること幾春秋。期する所弘道に在り。誰か滛浮の身を惜しまむ」

此人の社會地位を思はずに、乙子祠畔で喰はず貧樂の生活を續けた寒僧と言ふ點にばかり、思ひを集めるのは、佛子としての深い生を截り捨て、見るようになるのではないか。

此詩で見ても、慷慨もあり、自得もあり、決して唯の詩僧並みの平仄を整へた人でないことは決る。尤、詩だから自ら其本質や、據る所の作風に左右せられて、多く思はぬものも出て來ると言ふこともないではない。良寛には勿論、模倣は可なり深い病になつてゐるが、其中から個性が輝き出てゐる。

詩も、東坡や淵明や、もつと更に寒山をなぞつたものは多く見られるが、杜甫や、韓昌黎を目標としたものなどは、なか／＼さう安易なばかりはない。實にへうきんな拘泥のない生活が、多く詠ぜられて居るかと思ふと、半面極めてきちやうめんで氣むつかしい所が出てゐる。おもしろ半分は調子に乗つて作つて居るかと思ふと、又非常に苦吟して居る所が見える。さうして、

古詩の骨法を正しく得てゐるものもある。良寛は、詩人として相當に高い才能を持つて居た。唯、詩に執することを善しとせなかつた爲か、特殊な風格は見せながら、雄篇傑作を残すことがなくて済んだのであらう。彼も亦、五言に格高くして、七言に若干品低いものを交へて居る。が、其だけではない。譬へば、「讀永平録」の一つなどに見えた趣きのものも、なか／＼ある。

春夜蒼茫二三更、春雨和雪灑庭竹。欲慰寂寥良無由。
背手摸索永平錄、明窓下文几案頭、燒香點燈靜披讀。
身心脫落只貞實、千態萬狀龍弄玉、出格機擒虎兒、老大、
風係西竺憶得疇昔在圓通時、先師提持正法眼。當時洪
有翻身機爲請拜閱親履踐轉覺從來獨用力、自茲辭師
遠往返吾與永平有何緣、到處奉行正法眼……

久しく良寛研究を續けて居られる相馬御風氏はじめ多くの方々の解説をこゝに借用しない非禮

は、褒むべきではないが、故らにするのではない。
傳説と詩と、相照して見ると、十八歳出家以前に、早くも遊里に足を踏むことを覚えて居たのは、察せられる。

『平生少年の時、遨遊繁華を逐ひ、能く嫩鶉の衿を著け、好みて白鼻の驢に騎し、朝に新豊の市を過り、暮に河陽の花に酔ひき。歸り來りて何處なるかを知らむとすれば、笑つて、莫愁の家を指す』

と趣向を同じうした數首は、年四十に近くなつて歸國の後、其放蕩の時代を回顧しての作であると思はれる。

廿二歳尼瀨の光照寺を去り、國仙和尚に伴はれて備中玉島圓通寺に行つたが、其處に寛政七年まで居つた。此間に父山本以南は、郷里を出奔して京都で横死したと言ふ傳へになつてゐる。かう言ふ風に、庶民ながら聞えた名家の退轉して後、寺泊に還つたのである。此間に出來た詩は、相當にあらうと思はれる。歌の方は思ふに、多く歸國の後の作が、傳つて居るのではなからうか。殊に四十七から十二年に互つて住んだ國上の五合庵時代から、歌に興味が深まつて來

たものやうに思はれる。文化十三年に山下の乙子の社の傍に下り住んで、こゝに亦十年、其後更に里近い處へ迎へられて島崎村に六年生きて居た。此間の歌もあつて、辭世作に及んで居るのだから、少く見つても廿年、長くは三十年に互る作歌經歷は考へられる。

恐らく禪僧としての當然の素養たる詩文から、和歌の方へ興味が移つて、次第に其方に傾いて來たのではなからうか。其に、良寛に書を懇望する人たちの爲にも、訣り易いと言ふことを主として、禪家風な氣樂な肩の張らないものを書いて與へる機會が、次第に多くなつたものであらう。

良寛僧は、竟に一雲水で終つたと同じである。住職として法統を嗣ぐ者は、自ら師家との關係の深淺によつて、定まることが多かつた。中年にして、國仙和尚に従つて遠く遊んだ彼には、一寺に住持する機縁が起らなかつた。亦さうした浮世の外に、又一つの家を構へると言ふやうな事は、其希はなかつた所でもあらう。「唱導詞」にも、『師は盛んに宗稱を唱へ、資は隨ひて之に和し、師資互に膠漆の如く、死を守りて敢へて移らず』と言ふのは、師家と檀那との交渉の煩しさを述べたものと見てよいだらう。だから彼の文學を見るのに、寺持ちの師家と一つに

見るやうな立場からするのでは、根本に間違ひがある訣である。さうした自由性が極度に出て居るのも、彼においては決して街ひではない。つまり、禪家普通の理論を行つてはなくて、自らなる生活氣分なのであつた。

短歌様式を採るものに、道歌と言ふ一類があつて、狂歌の一つの出自を示すものである。吾々はどうかすれば、短歌の中から鋭敏に道歌要素を感じる。少くとも、作者に其成心のないものまでも、さうした型に入れてしまふことがある。尤、さうした傾向の歌は、其作物自身大抵、さうしてでも補足しなければならぬ弱點を持つて居る訣でもある。良寛の作物にも、さうした點がある。だが、その長歌はわりに、我々の感情は枉げずに、とり入れられる。

白 髪

かけまくも あやにかしこし。言はまくも畏きかもな。ひさ
かたの 天の尊のみ頭に、白髪生ふる。朝には臣を召さしめ、
しろがねの鐺を持ちて、その髪を抜かし給ひて、しろ金の箱に

秘めおき、あまづたふ 日嗣のみこに傳ふれば、日嗣のみこも、
つがの木の いや續々に かくしつゝい傳へますと聞くが、
しも 怜

世にみつる寶と言へど、白髪にあに及ばぬや。千ぢの一つも
白髪は、よみのみことの使ひかも。疎にな思ひそ。その白髪を

白髪には、趣きの違つた長短歌が今一聯ある。其方は世間普通の「霜」に譬へるものよりは、
幾分思想を持つて居るか、と感じられる程度の物に過ぎない。が、其反歌の一つ「白髪は、お
ほやけ物ぞ。尊哉人の頭も、避くと謂はなくに」とある。其などから、此長短歌は展げて來た
ものらしく、とても珍しい考へ方を、民間傳承の噂咄からとりあげて作つてゐる。かうした心
の觸れ方は、文學を解しないものにはない事である。たとひ短歌を何百千萬作つたところで、
行き當らない筈の心である。其をかう採りあげて、神祕に、而も潤ひと懐しみとを放さずに、

明るいものにして來たのは、短歌にない文學境を持つて居たことを示す。さうしてこんなのに
こそ、漢詩が深く根柢に光つてゐる氣がする。其ほど我々を驚かしたものである。長歌自身は、
萬葉の調子に囚はれず、既に新しい詩らしく流動するものを持つて居る。だから、「……日嗣
のみこに傳ふれば、日嗣のみこも つがの木の いやつきく……」と謂つた平安朝以後の
長歌調子になつてゐる。而も良寛においては、其すら自然なのである。『月の兎』に、「……食
物あらば給へとて、尾花折り伏せ息ひしに、猿は林のほつ枝より木の實を掴みて獻せり。狐は
築のあたりより魚を咋へて來たりたり。兎は野べを走れども、何もえせずてありしかば、……」
など言ふ風に、五七調も自然であり、七五調も自然であり、又其外の律にも自由に變化する。

鉢坊主

鉢たゝき 鉢たゝき 昔も今も鉢たゝき。鉢たゝき 鉢たゝき
鉢を叩き 鉢を叩いて 日を暮せ

人にかはりて、

二十日講のこむなさか 塗り物 たゞはくるゝとも、おらい
やよ。漆地ほしぬらひくは、投げ刷けの たつた一刷け

寺泊に飯こひて、

こきはしる鮎にも 我は似たるかも。朝には上にのぼり、かけ
ろふの 夕さり來れば、くだるなり

○

夜や寒き。衣や薄き。すみのをと 閨のふみ一筆染めて、顔
あけて 昨日は怨み、今日はまた戀しゆかしき とりくの
何からさきへ あしむむき

新派歌人の間に、十數年長歌が相當に行はれ出したが、私も實は、その最拙劣な一作家だが、
どうも私の内證的事實から言へば、——さうした影響はなく、他の人々のするのに促された傾

きのあるばかりだが——さうした長歌には、萬葉と言ふよりも、一度良寛の見本を通したやう
な處がある。だから、昭和の「長歌」は、新體詩を出た作者が、其に飽滿して、新しい型を良
寛に見出したのだといふ方が、適切な氣がする。

手毬をよめる

ふゆごもり 春さり來れば、飯乞ふと 草の庵を立ち出で、
里にい行けば、たまぼこの 道の巷に、子どもらが 今を春べ
と手毬つく ひふみよいむな。汝がつけば 我はうたひ、我が
つけば 汝はうたひて、かすみたつ 長き春日を暮しつるかも
かすみたつ 長き春日に、子どもらと手毬つきつゝ、今日も暮しつ

此には「あづさゆみ 春さり來れば」からはじまる殆同形の「手毬」と言ふ長短歌がある。少
しの違ひだが、此方が幾分立ち優つて居るやうに思ふから採つた。

鉢の子は愛しきものかも。しきたへの 家出せしより、朝に
 は 腕に掛けて、夕には 手上に載せて、あらたまの 年のを
 長く持たりしを。今日よそに忘れし來れば、立つらくの たづ
 きも知らず、居るらくの すべをも知らず、かりごもの 思ひ
 亂れて、ゆふつゞの か行きかく行き、たにぐゞの さ渡るそ
 こひ、あまぐもの 向伏す極み、天地の 寄り合ひの 限り、杖つき
 もつかずも 行きて、求めなむと思ひし時に、鉢の子はこゝに
 ありとて、我がもとに人は持て來ぬ。いかなるや 人にませか
 も。ちはやぶる 神のりかも。ぬばたまの 夜の夢かも。嬉
 しくも持て來るものか。よそしなへ持ち來るものか。その鉢の
 子を

道の邊に 莖摘みつゝ、鉢の子を忘れてぞ來し。 その鉢の子を

鉢の子を 我忘るれど、取る人はなし。 取る人はなし。 鉢の子

あはれ』

此にも三通りの作り替へがあつて、此が其一番長いものである。部分には力劣りのしたところもあるが、生活も現れ過ぎるほど現れ、感情も豊富に出て居る。其に、如何にも伸びがよい。而も亦、敘事詩才能が顯れてゐるので、之を擧げた。處どころ用語に誤用のあるのは、此時代の事、而も此方面は獨學だらうから、是非もない。「たなへに載せて」「立つらく」「居るらく」皆むちやである。だがよく訣り、感觸は害しないから、擬古文辭としては、さし支へはない。「かりごもの——ゆふつゞの——」は生氣のない類型であり、「たにぐゞの——あまぐもの——」は、其上に、此歌では誇張し過ぎて感じられる。さわたるそこひなど言ふ無法な使用例は、却てほゝゑまれる。

良寛の歌には、此後も言はねばならぬが、同じ題材を作り直したと言ふよりも、前のものをく

り返して書いてゐる中に、變化したと言ふ位の替り目の少い、凡同じやうな作品が漢詩にも長歌・短歌にも多いのが、一つの癖である。まるで、良寛集編纂の手落ちとでも見えるやうに。だが、決してさうではあるまいと思ふ。

一通りこの人の作物を見ると、古典としても、非常に古い時代めいたものと、中世風なもの、其上に極めて近代式な感じを持つたものがまじつてゐるやうである。其では、さうした使ひわけを創作態度として持つて居たのだらうか。本居宣長一派のやうに。けれども若し、此らを見ると、考へは別に湧くだらう。

一つ松

國上クニガミの大殿の前の一つ松。幾代經ぬらむ。ちはやぶる 神さび立てり。朝には、い行きもとほり、夕にはそこにいで立ち、立ちてゐて見れども飽かず。一つ松はや

山かけのありその波の 立ちかへり見れども 飽かぬ一つ松かも

岩室の松

岩室の田中に立てる一つ松。今日見れば、時雨の雨に濡れつつ立てり。一つ松 人にありせば、笠かさましを。蓑著せましを。一つ松あはれ

岩室の田中の松を 今日見れば、時雨の雨に濡れつつ立てり

又、旋頭歌の部に、

岩室の田中に立てる一つ松の木。今朝見れば、時雨の雨に濡れつつ立てり』

一つ松 人にありせば笠かさましを。蓑著せましを。一つ松あはれ

良寛自身におけるかうした類型はまだある。前のは獨鈷の松の歌だといふが、此方には、岩室の松ほど濃厚には出て居ないが、やはり一つ松なる語に惹かれて、日本武尊の「尾津ノ崎なる一つ松あはれ」の印象が見えて居る。又、隠約の裏に、「岩屋戸に立てる松の木。汝を見れば、昔の人を相見る如し」「はだすゝき 久米の若子がいましけむ志都ノ岩屋は、幾代経ぬらむ」などの影響が内在してゐるやうである。

『大刀佩けましを。衣著せましを』を襲と笠とにただけと言へば、其までだが、良寛では今一應、自分の心で、近代式に活して來たものと見るべきだらう。古典文學から翻作した作物の研究は、別に積まれなくてはならぬ。が、此人においては、歌だけが、彼の文學ではなかつた。彼の文學領域は、もつと廣かつたのだ。其から思へば、後生大事と、古歌を剽竊するやうな態度に出なくともよかつたことは信じてよい。つまり古典も、創作も、彼の内では極めて安氣に融合して來るのである。其は記憶の錯誤と言ふでもない。前代の作物をあつさり、どうかすると半分は、自分の物のやうに感じたのだらう。

良寛にとつては、ほんの僅かのきつかけで長歌の一部であり、又、旋頭歌にもなり、短歌にも

なつて來る。常に流動して居たのである。自分の物であつて又、同時に自分の物としても、はつきりした形を採つては、心に印して居なかつたのである。何だかかう、古語古詞の中から、近代感を引き出す一種の才能を持つて居た人ではないかと言ふ氣がする。

「時雨の雨に濡れつゝ立てり」は、旋頭歌において、一番緊張した形を保つて居る。さうしてさう言ふ確立の上に、短歌としての堅固さをも、徐々に持つて來たのであらう。何にしても此句が、周圍の詞章に及す効果は、ある近代性である。一つは良寛の古典に包まれきらない個性と共に、も一つ更に大きな原因は、古典に關しての理會が、十分でなかつたと言ふ點にもあると思ふ。其爲に、古典の堅さを、近代の緊張味と同様に感じさせるのである。

……すべをなみ 庵を出で、見わたせば、五百重山 千重に雪
ふり雲隠り 袖さへひちて：歸り來て聞にこもりて(後なし)

この夜らのいつか明けなむ。この夜らの明けはなれなば、女
來てはりをあらはむ。臥いまるび明しかねけり。長きこの夜を

此等の歌、古體のまゝでありながら、部分的に近代感のしみくとしたものが出てゐる。其で全體が近代風に感じられるのである。だから、ちよつとでも、近代生活の斷片が出てゐると、歌柄ががらりと、かぐはしく感じられるのである。

貧しきをのぶる

あしびきの 山田の田居に慮^{イサ}して、 晝はしみらに、 飯乞ふと
里に出で立ち、かぎろひの 夕さり來れば、山越しの風をとき
じみ、門さしてあし火焚きつゝ、いにしへを思へば、夢の世に
こそありけれ

「飯乞ふと里に出で立ち」の句がある爲に、一首の古い調和が俄然として新趣を動して來る。「かぎろひの 夕さり來れば、山越しの風をときじみ」などの古い語句が、如何にも生きくとして觸れて來るのも、其爲である。

集には長歌と、旋頭歌の區畫は立てゝあるが、短い長歌は旋頭歌の部に相當にあり、長歌の部にも勿論同様のが這入つてゐる。其編輯者には、良寛の氣持の影響すら見えてゐる。良寛は、旋頭歌の様式を知つて居たやうでもあるし、又知らない點もあつたやうである。此は、王朝時代の歌からしてさうで、其後歌學者の間にも誤りが傳へられて來たのだから無理もない。「577。577」の形に正確に詠んだらしいものが多く、さうでないものが七首あるに過ぎない。其種類の旋頭歌と言ふべきものは、長歌と區別が、實はつかぬ。さうして、其少し伸びた小曲といふべきものが、良寛自身の拍子を極めてよく出してゐる。さうして其が又、普通の長歌の中にもわりこんで、古風のものと同ら割^{わか}れて來る。そこに、良寛特有の長歌が生れたのだ。

ひさかたの 雪かきわけて、 さすたけの 君が掘りけむ早百

合根の 早百合根の その早百合根の あやにうまさよ (長歌の部)

山笹に蔽^{おほ}たばしる音は さらく。 さらりくさらくとせし心こそよけれ (旋頭歌)

かう言ふものになると、實に良寛の様式における自由性が示されてゐる氣がする。何だか、一つ先に新しい詩形の暗示を感じて、之を長歌にしたり、旋頭歌にしたり、短歌にしたり、色々其を具體化しよう、とする苦悶の現れたと言ふことも出来る訣である。

『深山ミヤマ風カゼのを笹ササの霰ユキの　さらり　さら／＼としたる心こそよけれ。けはしき山のつゞらをりのくるり　くる／＼としたる心は、
おもしろや　—松の葉』

此小唄を唄本で見たか、其とも民間に傳承せられた民謡として聞いてゐたのか、ともかくも、ほんのちよつぱり旋頭歌調に調へ入れることによつて、相當に別様な生命を生じさせてゐる。だが普通の見方から言へば、大膽過ぎたし、かたと言ふことになるだらう。

時鳥鳴くや　五尺のあやめ草　—芭蕉

此は、「——五月の——あやめも知らぬ戀ひもするかな(古今)」と言ふ歌から截斷して來たも

のでなくて「五尺のあやめ草を截りたる様にすべし」と言つた歌論の語の支持もあつて、獨立性が出來て居る訣なのである。此が、正しい誹諧の鑑賞法である。併し誹諧時代を過ぎた普通の讀者には、其處まで切實に感じられないのだから、良寛の場合と大した相違はないかも知れない。さう言ふ態度に這入るものは、芭蕉以下随分見えるのである。だが、良寛のは、如何にも、前代作物に對して大膽である。少し放心状態にあるのではないかと思はれるほどである。だが、私にとつては、此問題より先に、かたづけて置くべきものがある。

草のへに螢となりて待ち居らむ。妹が手ゆ　黄金の水を賜ふ言トクば

(旋頭歌の部)

草むらの螢とならば、宵々に、黄金の水を　妹賜うてよ (短歌の部)

山臥しの峰かけ衣。何と染めよ。肩裾萌黄、袖は紅クレナキ

山笹の霰同様、此等は、小唄・童謡の雛案である。かうした趣向を用意してゐると言ふより、